

輪島市皆月日吉神社山王祭

フォトエスノグラフィー祭日編

輪島市皆月日吉神社山王祭

フォトエスノグラフィー祭日編

地域文化研究フィールドノーツNT(2)





輪島市皆月日吉神社山王祭

フォトエスノグラフィアー祭日編

目次

● はじめに	4
● 祭りの概要と近年の変化	5
1 宵祭り 曳山午前	12
曳山への神事	12
曳山を構成するポジション	13
宮の坂	16
ミズバタとオオテブリ	21
ニシデの通り	27
イッチョモの角	30
海岸道路	33
コラム① テブリの技術継承	36
2 神輿の行列	38
神輿のお発ち	38
神輿の行列	39
神様岩	44
コラム② 御神酒係と会計	48
3 宵祭り 曳山午後	50
ヤマの再開	50
海岸道路	56
デムラ	58
ヤッサー	60
4 神様井戸と提灯点灯	64
デムラの端	64
神様井戸の神事	66
提灯点灯	67
提灯行列	70
5 御飯屋の賑わい	76
新橋、再び	76
御幣ギリコ	84
神輿	87
ヤマの下	91
コラム③ タカヤマとオオテブリ	92
6 本祭り(1) 本町の曳行と御飯屋のお発ち	94
ヤマ飾り	94
曳きはじめ	98
二度目のヤッサー	102
御飯屋お立ち	104
コラム④ 音頭取り	108
7 本祭り(2) 宮の坂から宮入り	110
宮の坂の下	110
最後の御神酒	113
夷坂のヤッサー	118
神輿の宮入り	121
後片付け	126
アトフキ	129



● はじめに

本ブックレットは、『輪島市皆月日吉神社山王祭フォトエスノグラフィ―準備編』の続編である。前編が祭りの準備期間にフォーカスしたのに対して、本編では祭り当日の式次第を整理している。本編も人間文化機構と国立歴史民俗博物館が推進する「地域における歴史文化研究拠点の構築プロジェクト」の中間発表としての意味をもつ。

また本ブックレットは、科学研究費「文化の主體的継承のための民俗誌の構築―マルチメディアの活用と協働作業を通じて」（基盤研究（B））の助成も受けつつ制作した。このプロジェクトでは、日本の地域社会が失いつつある生活文化の諸相を持続的に継承し、活用するための基盤となる、マルチメディアを用いた民俗誌の作成を目指している。この研究は、①人類学、民俗学の民俗誌記述における理論的、倫理的な課題の克服、②現代的メディア状況に対応した民俗誌実践の試み、③地域社会への持続的な文化支援という側面を持っている。研究者と現地の人びとの対話と協働を通して、多様な価値観と視点を内包した、自己表象としての民俗誌を共に創出する。文字情報はもちろん、画像や動画をういたネット上での公開も視野に入れた民俗誌であり、人びと自身が主体的に選択し、積極的に継承、活用しようとする文化についての更新可能な―メディアを通じて文化実践を上書できる―記録の構築を目指すものである。

本ブックレットは、地域文化の継承と新たな展開を目的として構想されている。しかし、前編において示したように地域文化は、社会の疲弊と並行して危機的な状況にある。当該地域での過疎化・高齢化に歯止め

はかからない。今後もドラスティックな変化は望むべくもないだろう。そのようななかで、数少ない現地の人々、なかでも青年会員は、現実と向きあいつつ、自分たちにできることを模索している。彼らは地域の伝統文化を受動的に固守しているのではなく、現代の生活世界のなかに再編成し、その実践と継承に矜持を抱き責任を自覚している。

彼らとの交流の過程で、研究・調査を行う立場にも、きわめて重要な変化が生じた。このような実践の蓄積は、研究者たちが捉えきれなかった文化のアクティブな側面を示してくれる。それは新たな文化概念へとバージョンアップするための重要な契機になりうる。研究者と文化の担い手が協働で創造する文化を、全体的で俯瞰的に捉えなおす視座を構想することでもある。残念ながら、民俗学を含めた既存の日本文化研究において、地域文化への積極的な関与や応用的な立場を理論化する動きは、ほとんど進捗がなかった。それらは、例えば文化財指定に関わる調査報告のように、いわば必要悪として捉えられてきた面も指摘できる。

しかし、本プロジェクトと並行して推進されている国立民族学博物館の「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」や国立国文学研究資料館の「人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究」においても、同じように地域社会の要請に基づいたコラボレーションによる研究成果が、保存科学や歴史学を中心としたグループによって推進されている。

このような視点を統合することで、研究分野の根幹に関わる視座の展開が促進されるかもしれない。むしろ、今、この時代にラディカルな変革が行われなければ、地域文化はもとより、それらを研究する人文諸科学にも未来はない、と言えるだろう。

● 祭りの概要と近年の変化

祭りの行事次第

祭日編は、文字通り八月一日、一日に行われる皆月山王祭のドキュメントとなる。以下では、主に二〇一〇年以後の祭りの画像を通して、祭りの行事次第を紹介することになる。準備編とも重なるが、ここでは、簡単に祭りの概要を紹介することにしたい。山王祭で中心的な行事は、集落内を回る曳山と神輿の行列である。ヤマと神輿の運行経路と主要な行事の時系列については、一〇ページにまとめてあるので、各章をご覧になる際にも参照いただきたい。

一〇日の午前九時すぎ、神職による神事とともに宵祭りは始まる。かつては、それに先立って子供たちが「ヤマ引きにでてくんせうせ（し）」と行って集落の中を回った。舟形の上下二層式になったヤマには、シタヤマに小学生が乗りこんで小太鼓や鉦、横笛を演じ、タカヤマに中学生があがって、タケの立て下ろしなどの仕事をこなしていく。ヤマを引くのは主に青年会とそのOBである壮年層の男性である。

ヤマは午前中に集落の北側を移動し、休憩をはさんだ午後五時から南側を回る。その後、海岸道路でヤマ全体に提灯を灯し、村の中心部の海岸近くに設置された御飯屋まで引かれていく。提灯を点灯したヤマの姿は、山王祭のなかでもっとも華やかなシーンの一つとなっている。一方、神輿の行列は、午後四時すぎに神社を出発し、ヤマと同じ経路で集落内を巡る。この間、御神体ゆかりのある岩と井戸に対しての神事が行われる。途中でヤマに追いついた神輿の行列は、そのまま一つの行列となり、午後八時すぎに御飯屋にはいる。御飯屋では神輿入りの前に、御幣ギリコのお迎えがあり、かつては馬駆けの神事

も行われていた。

翌日の本祭りでは、午前中に御飯屋へのお参りが行われ、ヤマ引きは午後二時から始まる。一時間遅れて、神輿の行列も御飯屋を出発する。ヤマと神輿は主に村の中心部を巡ったあと神社に戻る。村の中を回るときには「ヤツサー」が行われ、オオテブリによるヤマの方向転換も行われる。「ヤツサー」は、タカヤマの前面に青年会員たちが出張り、かけ声をあげながら、ヤマの上で暴れることをさす。一方、オオテブリは、テコの原理でヤマの方向を変える太い木の棒のことである。それを車軸にあてがい、青年会員たちが力をかけて回すことで、ヤマの方向が修正される。こうして宮の坂をあげりきり、神社の境内をめぐってからエビス坂で最後のヤツサーを行う。かつてはこの後にもう一度馬駆けが行われた。今は神輿が、境内をめぐるおえると（都合三周）、御飯屋と同じく若い衆に引き継がれ、宮と鳥居の間を三往復して宮に納まり、祭りは終了する。

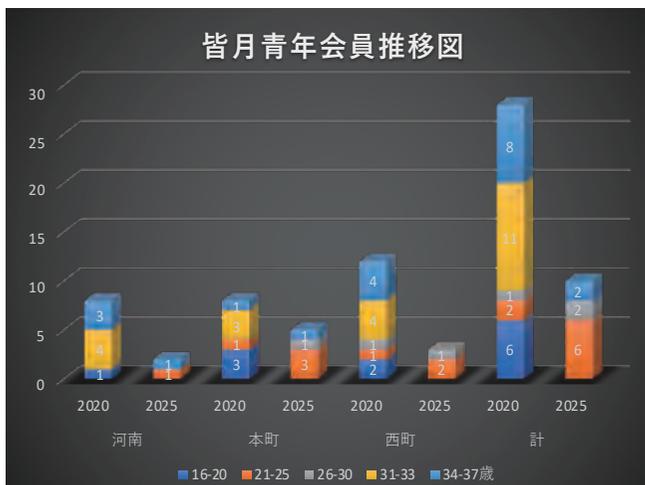
かつてこの山王祭では、祭り当日の一週間前から準備が始まっていた。準備に携わる組織は大まかに三つに分かれる。まず子供会があり、皆月の小学四年生から中学三年までの少年男子によって構成される。次が青年会である。これは中学卒業後、三七才までの男性が所属する。最後の人足は地理的に三つに区分されていた。皆月は村の北からニシデ（西町）、本町、デムラ（河南）の三つの地区に分かれて各々の班を構成しており、これが毎年交代で祭りの準備に携わっていた。かつての皆月では、三年に一度、祭りの準備の分担が回ってきたことになる。ちなみに皆月には、地域を一〇に分けた組という組織もある。各組では組親が選ばれ、彼らと区長が中心となって、皆月の運営にあたる。一から四組がデムラ、五から七組が本町、八から一〇組がニシデに属する。

もともと祭りの準備の大半は、子供会と青年会が行っていた。人足の仕事の実質的に八日、九日に集中しているのに対して、子供会と地元在住の青年会員は、四日から休みなく作業をこなしていかなければならない。さらに祭り前日から宵祭りの朝にかけて、子供たちはほぼ徹夜で準備に従事した。約三十年前まで彼らは、祭りの準備のために神社の拝殿に泊りこみで作業を行っていたのである。

変わりゆく祭り―危機的な組織運営

皆月山王祭は、近年の社会変化、端的に言って過疎化、少子高齢化の影響を大きく受けてきた。まず、大きな変化は、二〇〇四、五年頃を最後にして、子供たちによる準備作業がなくなったことである。この時期、準備に携わる小、中学生の男子がほとんどいなくなる。結果として祭りの準備の多くを、青年会と人足に割りふる必要に迫られた。しかし、青年会も地元在住の会員が減少を続けており、準備期間にコンスタントに皆月で作業することとは難しかった。そこで青年会では、子供たちが行っていた一連の宮仕事を、祭りの二週間前と一週間前の週末に行っている。

一九七〇年代まで青年会は、会員数は一〇〇名を超え、会長は選挙によって決められていた。経済的にも人員的にも、祭りを支える中心的な組織であった。現在、青年会員は三十名を切り、祭りの運営に関しても皆月区の支援が欠かせない。区長を頂点とする



0-1 皆月青年会員推移図

祭りの運営組織では、ヤマの少人数組織のリーダーという位置づけに落ちついている。確かにかつて程の威厳はなくなったとはいえ、皆月山王祭において青年会組織の役割の重要性はいささかも減じてはいない。しかし、図0-1のように会員数の減少は危機的な状況にある。青年会組織の崩壊は、ヤマの運行停止を意味している。

他方で皆月区での人足の割り当ても、これまでのような三班体制を維持できなくなっていた。世帯の減少や高齢化の著しい班があったためである。そこで各組ごとに一日二人ずつ、計二〇人の人足が出て、合同で祭りの準備にあたること決められた。浜の掃除、宮の掃除や幕張、旗立ての仕事と御飯屋立てが主な作業である。なかでもネジンカキやダシオコシというヤマの組立に関する作業は、青年会との協働で行うようになっていく。祭りへの参加形態もスリム化がはかられている。本文で紹介するように神輿の行列での旗持ちは二〇人から一〇人に半減された。

新たな創造

危機的な状況は、祭りの準備形態、祭りを運営する組織の形態、祭りの運営形態の各々に変化をもたらした。それらの変化について青年会での活動を中心にみていくことにしたい。まず、祭りの存続を可能にするための技能の展開や資材の導入を指摘できる。その大きな変化の一つが、電池式ロウソクの導入である。それまでロウソクを使って点灯していたヤマの提灯を、ほぼ全て電池式のロウソクに変更したので

ある。これについては、本文で紹介しているここでは省略する。ただ、設置に時間がかかり、提灯の損耗も大きかった従来の和ロウソクでは、今日まで提灯点灯を持続できたかどうかは大いに疑問である。

準備段階での奉灯貼りにも効率化がはかれるようになった。かつて御幣ギリコと鳥居は、各々のパーツごとに和紙を貼りつけるにとどまり、組立自体は一〇日の昼休みに行っていた。しかし、ロウソクの切り替えと同時期から御幣ギリコは、全てのパーツを組立て、鳥居は三つの主要なパーツにまとめて番線で固定した。これによって少ない人数でも、昼休みの時間内に作業が完遂できるようになった。

効率化と省エネ化は、御神酒の運搬や樽への移しかえの場にもみられる。祭りの最中に御神酒係は、六個ある樽をほぼ二人で移動させねばならない。御神酒が心もとなない場合は、一升瓶を何本かもち運ぶこともある。そこで青年会では、まず、御神酒の樽や一升瓶を運搬するためには、まず、御神酒の樽や一升瓶を運搬するためのキャリアカーを導入した。また、御神酒を樽に効率的に移せるようにロートも携帯するようになった。

次に人的資源の先細りは、新たな人材の参加を可能にもしている。本来の皆月青年会の規約では、会に加入できるのは皆月で生まれた男子に限られていた。父や母が皆月の出身であったも、自身が皆月に生まれなかった者に青年会への加入資格はなく、祭りに参加することもできなかった。しかし、少年時代から祭りに加わったり、父とともに祭りを経験していた世代の一



0-2 皆月日吉神社全景

部が、積極的に祭りに参加するようになった。彼らからも青年会費を徴収することで、正式な青年会員として、参加してもらうようになっている。

また、大きな変化として青年会の有志による祭の後片付けへの参加がある。青年会がヤマの解体と片付けに加わるようになったのは、二〇一四(平成二六)年からであった。この年、台風のためにヤマと神輿の渡御が中止になった。青年会の役員と区長や組親との話し合いの末、集落センター前でヤマの飾りつけだけが許可された。青年会は飾りつけでは飽き足らず、ヤマを海岸道路沿いにニシデまで引き、提灯点灯も行った。一連の流れの中で、自分たちが出したヤマに責任を持つために、ヤマの片付けにも参加したことが契機となった。

先に記した準備期間の変更でも、現在の青年会役員たちは、以前は人足に任せてきたネジンカキやダシオコシの技能を積極的に学ぼうとしている。ヤマタテと並行してネジンカキも行うようになったため、年長者からネジンのカキ方、ネジン棒の固定の仕方などを学びつつある。青年会は人足とも協働で作業をすることで、日程や人員の問題を発展的に解消している。

青年会以外にも祭りに新しい繋がりが生まれている。その一つが祭りへの女性の参加である。かつてはヤマに関する行事への女性の参加は忌避されてきた。私が調査を初めた一九九〇年の初頭、まだ、女性がヤマに近づくことも咎められた。引き綱を跨いだだけで叱られること

もあった。本文でも紹介する「ヤマがかやる」といった表現はそれほど珍しいものではなかった。

しかし、二〇〇〇年代の終わり頃、大きな変化が訪れる。当時、中学生で太鼓を学んでいた皆月の女子中学生が、実際に祭りの太鼓を叩きはじめたのである。彼女らは、九〇年代に結成された山王権現太鼓保存会に属する形で祭りに参加していた。彼女らはその後も祭りに参加し続け、就職したり、大学に進学して地元を離れてからも、祭りには集うようになっていった。少ないながらも太鼓を学ぶ女子が彼女らに続き、祭りにも参加するようになる。現在では、男性と同じように白装束に身を固めた女性が、祭りの太鼓の中心を担っている。

また、ヤマの運行にあたっては、青年会と村の年長者をつなぐ集まりとして、山王祭「連絡会」がある。テブリや音頭取りといった祭りのスペシャリストに「太鼓の会」が加わった集まりである。連絡会は、一日の朝、青年会を中心とした曳山飾りが終わったのちに、集会場にて会費制で催される宴席である。音頭取りやテブリ、太鼓の打ち手その他、それらの一線を退いた年長者たちも参加する。

この連絡会の発祥は、奉納相撲が行われていた時代に遡る。当時は、一日朝に本町の浜に相撲の土俵作りに協力した者への慰労の宴席があった。奉納相撲が行われなくなった一九九〇年代半ば以後も、宴席は設け続けられた。土俵づくりの慰労会から、曳山運行に関わる意思疎通を円滑に行うための「連絡会」になったわけである。

この連絡会によって、音頭取りやテブリを行う者たちは、ヤマの運行における各々の立場を背負いつつ、役割ごとに組織されたメンバーの一員として、ゆるやかな一体感を共有している。この一体感は、メンバーの多くが青年会役員を経験してきたことが大きい。彼らの多くは、安全なヤマの運行と祭りの存続について、関係者と意見を交わし

法で青年会から個別に礼を述べなければならぬことも多々あった。

また、連絡会での年長者との会話の中には、しばしば祭りへの愛着を超えた自意識が感じられる。とりわけ祭りの専門的な技能に関わる者たちの中には、自分たちの存在がヤマの運行を左右するという矜持とやや尊大な態度が表裏のものとしてある。このような意識は、時には周囲や下の世代との軋轢を生むことにもなる。

筆者自身は、連絡会で礼を言うことは止めて個別に訪問する従来通りの方法に戻してもいいと考えている。音頭取り、テブリはヤマの運行になくてはならない役割ではあるが、それらを含めた全山王祭参加者に上下の別はない。特定の役割を担ったからと言って、謝辞とお酒をもらわなければならないというものではないはずである。もちろん、青年会が全く感謝の意を示さなくてもよいという意味ではない。仮に提案として述べるが、一日入宮・神事が終わった後、青年会会長から、安全運行に関する御礼を祭り参加者全員に対して発し、祭り参加者全員が青年会役員に対してもねぎらいと感謝の気持ちの拍手がなされる方がいいのではないかと考える。

年長者に対して、若年層の側にも課題がある。とりわけ、現在、三十代末満の世代は、小・中学時代に大将を頂点としたヤマ仕事を経験していない。実質的な作業の多くを青年会、ムラに肩代わりしてもらってきた。このため彼らの多くは、ヤマの運行に必要な準備や諸作業への注意や責任感が希薄である。実際、青年会会員資格を持ちながら、前日までの準備作業には、ほぼ顔を出さない。にも関わらず、祭り当日に御神酒をいただき、好き勝手騒ぐことには抵抗を感じない。当日のヤマ飾り、昼休みの奉灯立て、祭りの最中の御神酒の運搬、オシミロップの手配、ハタダケの運搬、タカヤマでのタケの上げ下ろしといった作業を自発的に参加する者も限られるのが現状である。ヤマ

てきた。また、各々の役割だけでなく、他の役割の者と意見交換を行うことにより、自らの技術が評価され、他の役割からの要求がその者の発達段階に応じてなされている。このような場合は、各々の技能を新たに取得する者にとって、重要な機会を与えることになる。発祥当時から予期しえない会の内実の変化かもしれない。技術継承に課題を抱える中であって、効率的な後進の育成を行う仕組みとして、この連絡会の方が機能するようになりつつある。

課題と可能性

もちろん、課題は山積している。現実的に進行していく過疎化と高齢化は、確実に人的な資源を先細りさせていく。加えて、新たな繋がりや試みにも問題は生じやすい。

先に紹介した連絡会にも課題がみえてきた。組織の立ち位置としての曖昧さと世代間の意見の相違である。有志を中心に構成される連絡会は、成立から年月も経て、地域での認知度もある程度あがってきた。しかし、組織として年間を通した活動実態があるわけではない。一日の集まり(宴席)がすべてである。いつの頃からか、青年会は会長以下三役でこの連絡会に顔を出し、ヤマの運行に関し礼を述べること等を常としてきた。一部費用の負担を行っていた時期もある。

それまで青年会は、祭り翌日の一二日以後、音頭取り、テブリの係、旗ギリコに字を書いた者、各種修繕を行った者に対して、奉納された御神酒を持ち、個別に訪問して礼を述べてきた。しかし、彼らのなかに一二日には皆月を離れる者もいる。後片付け、清算を行う地元在住の青年会役員が不足していることも相まって、連絡会で効率的に礼を述べられるように改変したわけである。ところが当の連絡会には、役割を担う当事者が参加していないこともある。結果的に従来通りの方

の運行に多くの者の力が必要であることは理解しつつも、それを実行するのは自分ではない、のだろう。このような意識では、準備があつてこそその祭りが成り立たないことは明らかである。

文化資源としての祭り

以上の変化は、いずれも過疎化・少子高齢化に差し迫られた対処療法である面は否定できない。しかし、種々の逆境にあつて、祭りが地域全体にとっての文化として共有されてきた側面も指摘しておくべきである。新たな道具や技術の導入、人的資源の拡大、組織編成の柔軟な解釈といった営みは、当事者たちの意識や価値観のレベルでの変化を促してきた。物と情報、そして人の繋がりの変化は、祭りを現代の生きた文化資源として再創造する過程であるとも言える。

同時に祭りを巡る営みの共有は、個々人の経験の質としても深まってきたといえる。以前の青年会では、ヤマ以外には関心を示さない会員も多かった。彼らはヤマで暴れ、御神酒を好きだけ飲んで満足していた。しかし、近年、地元では「太鼓の会」が定期的に開かれ、青年会の役員とその家族が太鼓を叩いている。彼らは太鼓を学ぶ一方で、子供たちには小太鼓や鉦のレバトリを伝えている。技能を習得し、同時に教授する場合は、先の連絡会にも通じる世代を超えたつながりを生み出す場でもある。同時に祭り当日だけでなく、準備段階から、周辺の行事や芸能にも目配せすることで、祭り全体を捉え直す視座を彼らは養っているとも言える。このような視座を多くの青年会員が共有し、共感した者の輪を広げていくことが、これまでこの祭りがなしてきた営みを発展させ、祭り自体を持続可能なものとする方途ではないだろうか。

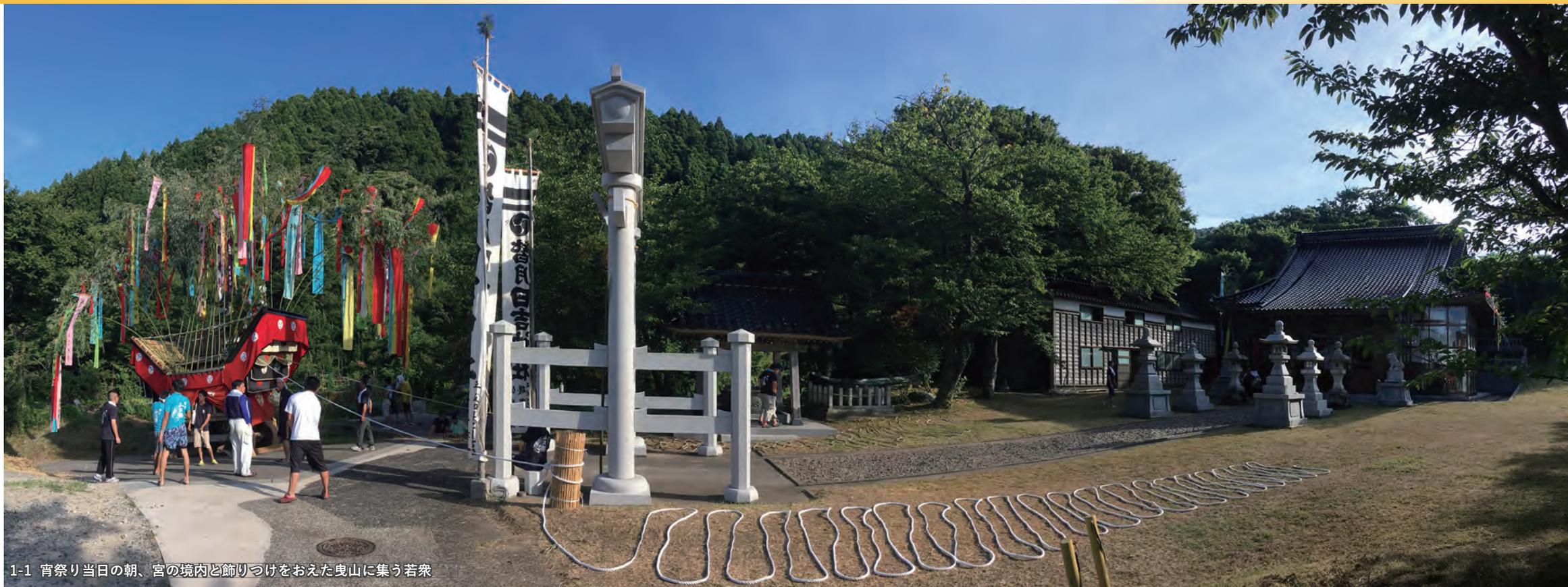
山王祭のタイムテーブル

日時	場所	行事内容	
10日	5時半	・日吉神社鳥居前 ・ヤマ飾り	
	9時20分	・日吉神社鳥居前 ・神事	
	9時30分	・宮の坂→ミズバタ→ニシデ ・ヤマ曳きはじめ	
11時	・伏見下	・伏見下に到着、時代人形の設置 (昼休み)	
16時	・日吉神社拝殿、境内	・神様のお発ち、神輿の出発	
16時40分頃	・神様岩(村の北端)	・神様岩の神事	
17時	・伏見下→デムラ	・ヤマ曳きはじめ	
18時頃	・茶木前	・ヤッサー	
18時15分頃	・デムラの端	・神様井戸の神事	
18時30分頃	・ショウゴロウ下	・提灯点灯	
20時	・御仮屋前	・御幣ギリコ(馬駆け) ・神輿の御仮屋入、神事	
11日	6時	・御仮屋小路前 ・ヤマ飾り	
	14時	・御仮屋小路前 ・ヤマ曳きはじめ	
	15時	・御仮屋	・神様のお発ち、神輿の出発
	16時15分頃	・宮本酒店前	・ヤッサー
	17時半	・日吉神社境内	・ヤマが日吉神社に帰還
	18時	・日吉神社境内	・(馬駆け)、神輿の宮入り

山王祭の曳山と神輿の運行図



1章 宵祭り 曳山午前



1-1 宵祭り当日の朝、宮の境内と飾りつけをおえた曳山に集う若衆

曳山への神事

午前九時を回ると、鳥居前に据えられた曳山の周りに、ちらほらと人が集まりはじめる。ほどなく青年会会長（以下会長）をはじめとする役員や曳きはじめに必要となる程度の人数が揃う。テプリ、音頭取り、オシミをつなげる人たちである。ヤマの前には神事に必要な棚や小太鼓、幣束や御神酒が整えられる。神事（ヤマのお祓い）がはじまる。まず最初に、神職が太鼓を打ち鳴らし、神事の開始が告げられる。ヤマの正面に御神酒を供え、大祓詞の奏上が行われる。その後、ヤマの正面を起点として、時計回りにヤマの四方をお祓いする。



1-3 全員のお祓い



1-2 太鼓を打ち鳴らす



1-5 四方に御神酒をまいて浄める



1-4 ヤマのお祓い

神職が正面に戻ったところで会長以下、参加者のお祓いが行われる。また二〇一九（令和元）年には、神職の計らいで会長による玉串の奉獻もなされた。御神酒についても同様にヤマの四方に振りまいてお浄めする。一連の所作を終えると再び小太鼓を奏して神事を終える。御神酒は青年会の役員によって回し飲みされる。

現在、曳きははじめの前に行われる神事は、一九九〇年代の半ばまでは宮からヤマが降りてから行われていた。本町とニシデの境にあった「神様岩」の場所である。一九九六（平成八）年に行われた宮の坂の横を流れる御手洗川の暗渠工事に伴い、神様岩が日吉神社の鳥居横に移転したため、現在の場所での神事となっている。

曳山を構成するポジション

神事が終わり、準備が整うといよいよ曳きははじめとなる。音頭取りの木遣が一しきり続き、会長の手があがる。「ドットコ」の合図である。



1-11 ヤマの曳きはじめ



1-12 テブリとオシミがブレーキをかけつつ慎重に動き始める

覆われたシタヤマに小学生が乗り込み、そのうちの二人は前方に据えられた小太鼓と鉦を叩いてはやす。小太鼓と鉦はバンナラシから使っているものである。かつてはその他の子供たちも横笛を持参し、各々の場面に合わせた祭り囃子を吹いていた。

タカヤマには主に中学生や高校生が乗り込んでいた。現在は中高生の人数が少なく、状況に応じて青年会員があがって作業する。タカヤマでは運行中のタケの立て倒しの作業が計八回ある。それ以外にも、場所によってはタケのハタが木や電線、屋根瓦に引っかかるからないようにしたり、倒したタケの位置を調整する必要がある（コラム③参照）。

引き手 引き手は、文字通りヤマの前方で引き綱を引く者のことである。「エイヤー、エイヤー」のかけ声に併せて後ろ向きに引いていく。激しい動きはなく、ヤマの中では比較的安全性が高いため、子どもから年配者まで携わることができる。戦時中の一時期を除き、「ヤマがかやる」（曳山が横転する）の意）として、女性がヤマに関わることは忌避されていた。しかし、人手不足となった近年では、女性が引く姿もみられるようになった。

オシミ オシミはヤマの速度調整、バランス確保のためにタカヤマを作用点として、後方または側方に伸ばされる綱である。宮の坂を下るときには後方へ長いものが二本、集落内を運行するときは後方へ短いものが一本伸ばされることが多い。二日間の祭りの順路には、下り坂が三ヶ所ある。各々の場所には、コンクリート製または木製の柱が地面に打ちこまれている。この柱にオシミを巻きつけ、オシミ同士と柱との摩擦によって下り速度を調節する。この巻きつけ方は船上で使われる技術である。

写真1-16は、鳥居の両横に据えられたコンクリート製の柱である。柱の周りにはタケを切り出して紐で結んだ道具を巻きつけている。こ



1-6-8 御神酒

1-7

1-6



1-9 ヤマに集う青年会と祭りのスペシャリスト



1-10 2018(平成30)年の曳山のスターターたち

歴代の会長も「宵祭りの曳きはじめが一番うれしい」と口をそろえる。過疎高齢化が進み、祭りの準備もままならない。毎年のように祭りの開催、ヤマの運行が危ぶまれるなかで、祭りを思う皆のおかげでヤマを下ろすことが実感できる瞬間である。

各々は運行に必要な役割につくが、これらの役割は予め決められたものではない。運行責任者である会長が指示、指名することもない。当日集まった者の中で暗黙の内に決まっていく。神輿渡御の役割が、氏子総代を兼ねる区長、組親を中心に決まることが対照的である。もちろん、会長や役員には、やるべき仕事や役割は決められている。ヤマの運行に必要な役割は、大きく七つに区分される。音頭取り、

ヤマの上下の乗手、引き手、オシミ、テブリ、オオテブリ、そして会長を中心とした役員である。オオテブリについては後で紹介するので、以下ではそれ以外の役割について簡単に紹介しておく。

音頭取り 音頭取りは、ヤマの曳きはじめや休憩時に木遣を歌う係である。引き綱の前後を行き来し、扇を持って目印となる。木遣とは、七七五調の歌詞を前半と後半に分けて歌い、綱の引き手たちが合いの手を入れる。ヤマの曳きはじめには、この木遣に続く「ドットコ」の音が、ヤマを動かす合図となる。祭りになくはない存在である（コラム④参照）。

タカヤマとシタヤマ ヤマは上下の二段構造になっている。胴幕に



1-17 オシミ (ニシデ側)



1-16 オシミ (本町側)



1-18 オシミの担当は、熟練者が自発的に配置につくことが多い



1-19 役員たちは、ヤマの前後や上下に注意しつつヤマをおろす



1-13 ダシダケを揺らす準備

宮の坂

の柱にオシミを数回巻きつけ、ヤマの進行に伴って徐々にゆるめ、綱を押し出していく。タケを巻くことで、適度の速さで送りだせる。テブリ、テブリと呼ばれる「ト」の字に似た木片をヤマの車輪と路面との間にはさみこんで、ヤマの進行方向及び速度の調整を行う係である。中腰で後ろ向きに進む姿勢のため、ヤマに関わる者の中では最も危険でかつ重要な役割を担う。通常は前輪の左右に一人づつ計二名がつく。急な方向修正を行いたい場合や、坂があがる場合には、後方車輪にも二名つくことがある。

青年会役員 役員は会長を中心に、副会長と役員からなる。会長はヤマの運行の責任者であり、場面ごとの判断を行う。副会長は会長の補佐として、ヤマの前後に分かれてオシミやテブリの動きを確認し、指示をだす。それ以外の役員たちも、前ヤマで若い衆を煽ったり、会長の指示を伝えることもある。また、奉納された御神酒や寸志を記録する会計係と御神酒の準備と後片付けに奔走する御神酒係に従事する。シタヤマに乗り込んだ子供たちの飲み物の買い出しと提供にも気を配る。それ以外にも彼らは、予備のタケの調達やハタや吹き流しの確認など、ヤマの運行に関わる諸々の作業をこなしていく。

宮の坂は、祭りのなかで最大最長の下り坂だが、そのオシミに関わる人間は、一本あたり二名で事足りる。前述の巻きつけ方により、少人数でもコントロールが可能なのである。理論的には一名でも下ろせるというが、安全のため二名以上が配置につく。

ヤマに括りつけるオシミは、ヤマの前方でもやい結びに始まり、タカヤマを経由し、後方に回る。タカヤマで前から後ろに渡される



1-15 オシミを張って強度を高める



1-14 徐々に坂をくだるヤマ



1-24 村の中心部に向かうヤマ



1-22 宮の坂でのテブリ (左)



1-23 宮の坂でのテブリ (右)



1-21 タカヤマでタケを揺さぶる



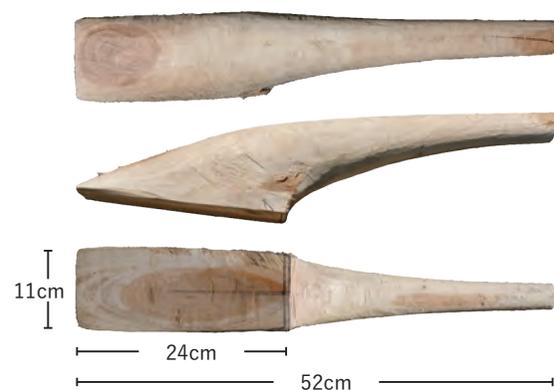
1-20 宮の坂をくだるヤマ

左右に滑り落ちることで行われる。テブリが車輪と接する面は、摩擦を減らすために御神酒や水をかけることが多い。下り坂ではヤマの勢いにつきすぎないように適度にブレーキをかける役割もたされている。前ヤマの二人のテブリは、同時にテブリを差し込むことはない(写真1-22、23)。両輪にテブリを挟むとヤマが止まってしまうからである。呼吸を合わせながら、交互にテブリを入れたり、ヤマをコントロールする。会長の指示もあるが、自らの目測も交えつつ、テブリの差し具合を調節していく。

宮の坂の途中で、タケを倒す。ここからは電線が道を横切っているためである。ニシデの村のなかを通り、海岸道路にでるまでは倒した状態で運行する。タケは必ずヤマの前後のダシダケから倒していく(写真1-26、28)。ダシダケを終えるとダシダケに近いハタダケを倒す。最後に倒されるのは、中心部のハタダケとゼニガタである。倒したタケはヤマの両翼にまとめてオリナワで束ねる。倒したタケを送り

を被るようになる。もっとも、ヤマのタケ自体は、数十メートルも下ると、全て倒すことになる。この時に折れたタケは下ろされて、飾りのハタや吹き流しだけが外され、シタヤマに入れられる。

宮の坂では、テブリの係も忙しい。あまり方向修正の必要はないが、道幅が狭いため、気が抜けない。テブリによる方向修正は、木片に乗りあげた車輪が左右に滑り落ちることで行われる。テブリが車輪と接する面は、摩擦を減らすために御神酒や水をかけることが多い。



1-25 標準的なテブリの大きさ

途中では、タカヤマの前後を貫く部材に一巻される(このことを「チョンをかける」という)。これによって下り坂では、単にブレーキとして後方へ引かれるのではなく、上から下方向へ力がかかることで、方向調整を行うテブリの効きを高める作用となるのである。

約二〇メートルの宮の坂を下る際の引き綱は、集落内を運行するときに後ろのオシミとして使用される細くて短いロープを用いる。下り坂のため、引き手に多くの人員が必要ないためである。反対に後ろのオシミには長い綱を二本使用する。近年、オシミの買い替えに伴い、坂の距離に対応した綱が使用できるようになった。結果として坂の途中に三本あるコンクリート製の柱に綱を架け替えることはなくなった。ただし長いオシミは、絡まって事故を起こす危険がある。事前に蛇行させて準備し、取り扱いややすくしている(写真1-1)。

宮の坂を少し下ると、道の上に大きな木の枝がせり出している。タカヤマにあがった者たちが途端に忙しくなる。彼らは、最初にダシダケ、次にハタダケの順で激しく揺さぶる(写真1-21)。下にいる者も、ハタや吹き流しが引つかかったタケの位置を知らせる。「町の方、もっと揺らせま」「ニシデの後ろのダシダケ!」、あちこちからそんな声が響くが、なかなか手が回らない。毎年、ベキ、ボキッといった鈍い音が何度か響く。木の枝に絡まったハタにタケがひきづられて折れてしまうのである。扱いが雑だと、ハタも枝に引つかかって破れてしまう。人数が多ければ、十分にタケを揺らすことができ、破損することも少ないだろう。

しかし、近年はタカヤマにあがる中学生や高校生が非常に少ない。他方でヤマの出だしは、オシミやテブリの動きに注視しなければならず、役員はタカヤマにまで手が回らない。下り坂を出発してわずか一〇メートルほどで、綺麗に飾られたタカヤマのタケは、結構な損害



1-31 引き手に集まり始めた人たち



1-30 再び動き出したヤマ



1-26



1-27



1-28 タカヤマのタケを倒していく

込む時には、前後での確認が絶対に必要だ。受け手を確認したうえで、タケの先を送りだす。ヤマの前後で作業するので、若衆たちの大声が響きわたる。また、タケから垂れ下がったハタや吹き流しは、運行の邪魔になるので、先をゆるく結んでおく（写真1-29）。
タケを倒しおえると、再びヤマは動きだす。ヤマが村に近づくにつれて、引き手の人数も徐々に増えてくる。村に近づく道幅も広がり、余裕が出てくる。かつてこの道沿いには、御手洗川という小川が流れていた。既述したように一九九六（平成八）年に河川工事が行われ、村に近い場所は、全て暗渠（あんきょ）になっている。このため近年では、比較的余裕を持ちながら、ヤマを下ろすことができる。



1-29 先端が結ばれた吹き流し

写真1-26～28 ヤマの端からタケを倒していることがわかる

写真1-29は前ヤマ部分に垂れさがった吹き流しを中心に先を結んでいる様子。吹き流しは先が5つに分かれているので、絡まりやすいため、こうやって軽く結んで固定しておく

ミズバタとオオテブリ

宮の坂を下りきると、ミズバタと呼ばれる四つ辻につく。辻の一角には、沢の水を引いて共同で利用できる水場がある。この角にはかつて神様岩があった（写真1-47）。ここで最初のオオテブリによる方向転換が行われる。

テブリが進行中のヤマの方向修正を行うのに対し、オオテブリはヤマが停止した際に方向転換を行う。また、上り坂やテブリに乗りあげるなどで進行が膠着状態となった際には、後ろの車軸を押し上げることで前に進行させる役目も担う。

長さ約三・八メートル、一三センチメートル角のアルミの角材二本がオオテブリとして使用される（写真1-42）。運行に必要な時には、前後二本の車軸にわたして収納する。方向転換時だけでなく、御神酒（小休止）の時には、ヤマの下から引き出して若衆たちの椅子がわりに用いられる。

オオテブリによる方向転換の方法は以下のとおりである。オオテブリを前または後ろの車軸と路面の隙間に差し込む。オオテブリと路面の接する部分が支点、オオテブリと車軸が接する部分が作用点となるテコの原理（第二のテコ）で垂直方向に持ち上げることによって車輪を浮かせ、続いて水平方向へと移動させることで方向を変える。実際には垂直方向と水平方向の移動は一連の動作によって行われる。



1-33 ヤマを確認する会長



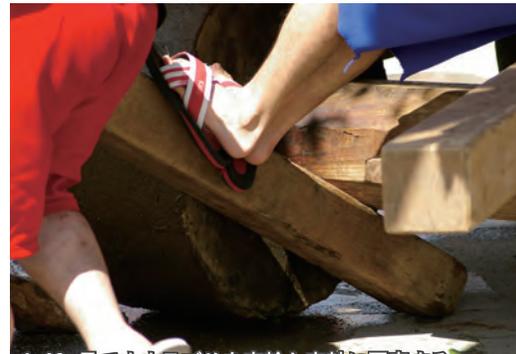
1-32 倒したタケの調節も行う



1-39 オオテブリを回す若い衆たち



1-41 オオテブリを回した瞬間



1-40 足でオオテブリを車輪と車軸に固定する

(写真1-39)では、左端がモト。逆の角度から見ると(写真1-40,41)のようになっている。モトが踏ん張り、オオテブリと車輪を固定する。この状態で他の者が力を入れれば、ヤマの車輪が浮き上がり、スライドして移動する

オオテブリの方向転換には一本につき五、六名が加わる。彼らは固定されたメンバーではない。臨機応変にメンバーを変えながら参加する。その中でヤマにもっとも近い者は、モトと呼ばれる。モトはヤマに腰かけて、オオテブリの根元を固定する。かけ声でタイミングを合わせるほか、オオテブリの挿入角度や向き、方向転換の終了を判断する現場監督の役割を担う。効率よく方向転換を行うためには挿入角度や向きが重要となる。角度は、路面に対しゆるい角度(「深い」と表現する)であれば、支点と作用点の距離が離れる。力を必要とするが、水平方向への移動距離を稼ぐ効果は高い。反対に急な角度(「浅い」と表現する)であれば、それほど負荷はかからないが、水平方向への移動距離は短くなり、方向転換を終えるまでの回数が必要となる。このコントロールをモトが行う。

かけ声は、モトの発する「ソラー」に続いてそれ以外の者が「ヤレコラーサー・ノウー」と発することによってタイミングを合わせる。「ノウー」の部分が持ちあげるタイミングである。このかけ声からオオテブリのことを「ヤレコラー棒」と呼ぶ者もいる。この時モトは、作用点がブレないように足で押さえつける役割も担っている(写真1-40、41)。かなりの重量を持つヤマに対する働きのため、体力の消耗が激しい。そのためこのオオテブリに携わる者は体力に自信のある高校生から二、三十代が中心となる。

通常、ヤマの前や後ろで一本または二本を用い、前



1-42 オオテブリの大きさ オオテブリは、先が磨耗して尖ってくるとその部分を滑りやすくなるため切り落とすことがある。元の長さはもう少し長い



1-35 前後でヤマを回していく



1-34 後ろヤマで車軸を押すオオテブリ



1-36 ミズバタの角でヤマの向きをなおす



1-38 一気にオオテブリを回す



1-37 掛け声に合わせて気合を入れる

写真1-37,38はいずれもオオテブリの様子。37はオオテブリが深く、38はかなり浅い



1-50 引き手も配置につく



1-48 音頭取りが唄い始める



1-51 ニシデの通りを進み始める



1-49 軒先で休憩する引き手たち



1-44 少し進んだところで休憩



1-43 ヤマガニシデの通りにはいる



1-46 ミズバタの側での御神酒の準備



1-45 オオテブリに並ぶ

述の方法で方向転換を行う。しかし、家屋が隣接するなど方向転換に必要なスペースが確保できないこともある。オオテブリの特殊な方向転換については後ほど紹介することとする。ミズバタはその年初めてのオオテブリの出番ということもあり、モトがかけ声の調子を確かめ、その他の者も力の入れ具合を確かめる仕種がみられる。年長者が、ミズバタの水を路面にまくこともある。車輪を濡らしてスライドしやすくするためである。

九十度の方向転換が終わり、ニシデの集落内へ少し進んだところで、御神酒（小休止）がある。この時二本のオオテブリは、ヤマの後輪の後ろに進行方向と並行に置かれる。青年会のルーキーから三十代までの若い衆（まれにそれ以上）が、オオテブリの上に向かい合って腰掛けて御神酒をいただく（写真1-45）。

御神酒は、六つある一升樽いっしょうたるに入れられ、参加者によるまわれる。樽はあらかじめミズバタの側においてあり、ヤマの動きを見計らって、御神酒を投入する（写真1-46）。これらの係は青年会の御神酒係が中心となる。このため、皆月の若い衆の間で「ミズバタの水」という呼称は、時に御神酒の隠喩ともなっている。ヤマ仕事の際の水分補給にも多用されるこの水場への愛着を込めたものもあるようだ。

御神酒の樽は、前ヤマと後ろヤマに三つずつ配られることが多い。前ヤマの二つは、まず、テブリに渡される。テブリの係は各々のヤマの車輪を清めてから御

かつて御手洗川のミズバタのたもとは、神様岩と呼ばれる石が据えられていた。ちょうど宮の坂と村の通りとの辻にあたる。1996（平成8）年の御手洗川の暗渠工事に伴い、日吉神社の境内に移された。この神様岩は、火伏せの信仰対象でもあった。

皆月は近世から繰り返し、大火に見舞われている。『七浦村志』によれば、天保年間には西出の集落が二度にわたり、1860（安政7）年にはDEMラでも、数十軒の家が火災で失われている。明治に入っても13年と37年に大規模な火災に見舞われた。特に1904（明治37）年の火災は、船小屋での失火から西出の42戸が延焼した。その際、火の手が本町にも近づいたが、この神様岩のところで収まったと伝えられている。

数十年前まで、2月9日には鎮火祭が営まれ、日吉神社とこのミズバタの神様岩、さらにDEMラの神明社にある神様岩にて神事が執り行われていた。この神明社にあった神様岩も、元来はDEMラの今出川のたもとにあっ

た岩を境内に移築したとされる。なお、鎮火祭が休止の後、日吉神社の春祭り（毎年4月初旬）にて、ミズバタの神様岩への神事が行われていた。

火災は村落の存亡につながるものであり、夏祭りでも火難避けの願いも込めて、ミズバタの神様岩の前で神事が執り行われたのだろう。



1-47 日吉神社境内に据えられた神様岩



1-59 前網の端は束ねて移動する



1-58 引き手から見たヤマ

ミズバタからニシデの集落に入ったヤマは、家々の軒先をかすめるように進行する。このニシデには、雑貨店（板倉）、日用衣料品店（日野尾）、電気店（中室）、菓子店（西）、米穀店（中尾）、飲食店（池田）、運送業（西出）、雑貨店（島本）があったが、現在ではガス、上下水道工事と形態を変えた中室が残るのみである。ヤマはニシデの通りを北のハズレまで進むことなく進む。タケは倒したまま移動するが、タカヤマには必ず数名が待機している（写真1-53）。狭い道路を進むため、ヤマが家屋に衝突したり、接触したりしないよ

ニシデの通り

神酒をいただく。それ以後は、順次近くの者たちに樽が回されていく。
 後ろヤマでは、オオテブリにねまった（腰掛けた）若い衆たちが、その年初めての御神酒をいただく。一年に一度の祭りの酒にテンションがあがる者もいれば、すでに各家で仕上がり（酔いが回り）、ピッチのあがらない者も、結構いる。
 なお、御神酒は、ヤマが家の前を通過するとき家人から青年会役員に奉納される。縁側に台を据えて、その上に置かれる場合もある。一升瓶には「御神酒一樽」と書かれた半紙がのし紙としてつけられている。半紙は、会計によってどの家から奉納があったのか記録された後、ヤマの前に吊るされたタケに括りつけられる。（コラム②、御神酒係と会計参照）



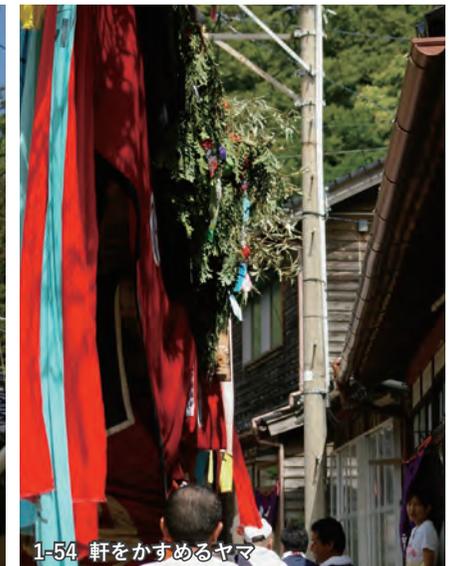
1-53 テブリ、オオテブリ、タカヤマが配置についている



1-52 ニシデの半ばに差し掛かる



1-56 ヤマの動きに合わせて倒したタケを調整する

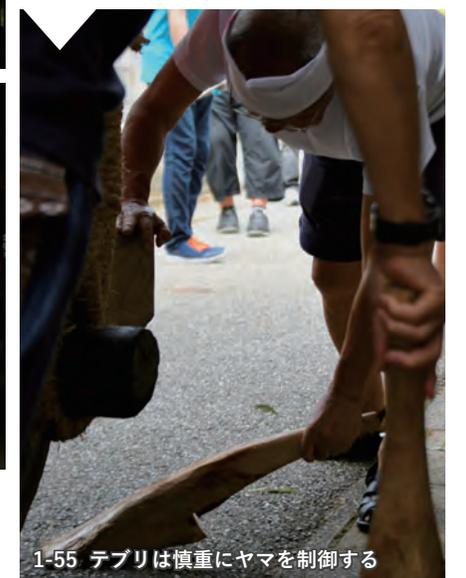


1-54 軒をかすめるヤマ



1-57 オシミを引くことでヤマの動きを調整する

家の軒のキワをいくヤマ（1-54）、その微妙な操作は、目測でテブリたちが行う（1-55）、タカヤマでは、タケやヒヨコダシに注意を払い（1-56）と後ろヤマではオシミを引く（1-57）



1-55 テブリは慎重にヤマを制御する



1-61 後ろヤマ



1-60 音頭取りは扇でヤマの進行を知らせる



1-66 ニシデの角、海岸道路から見たヤマの様子



1-67 ヤマの側面に二本差しされたオオテブリ

うに注意しなければならぬ。ヤマの外側に出たタケはもちろん、ヒヨコダシやキリ幕を引きあげる作業もタカヤマの係に求められる(写真1-56)。また、タカヤマでは、家々の間を横断する電線を避けて進むために、「又棒」^{またぼう}を用いて電線を持ちあげてかわすこともある。又棒とは、Y字になった木の枝を二メートルほどのタケの先につけた手製の道具である。

また、ヤマの後ろには、一本の短めのオシミが据えられ、若い衆たちの受け持ちとなる。すでに述べたように、本来、オシミは速度調整、バランス確保のために使用される。しかし、三十代以下の若者たちは、少しでも祭りを長く楽しもうと、故意に速度を落とすためにオシミを引っ張る。電柱に結びつけて運行を妨げた年さえあった。もともと、写真1-62~64のように若い衆の一部は、オオテブリを持ち出し、車軸に当てて、後ろからヤマを押し込んでいる。その場の状況に合わせて対応しつつ、一番、盛りあがることをしたい、というのが彼らの基本的なスタンスである。

ニシデの細い通りは、テブリの技術が求められる場所でもある。一瞬の迷いがヤマを軒先^{のきりさき}にぶつけることになる。テブリの判断を支援するため、会長と役員は、どの程度テブリをはさめばよいかを伝える。

ヤマが海岸線と並行して進むので、車輪の左右は、海、山と表現され、修正に必要なはさむ回数を推定して助言する。「山もう二つ」、「海側にもう一つ」といったようにである。このように祭りの現場での「左右」



1-62 ニシデを進むヤマ。空き地が増えてこんなシーンも撮れるようになった



1-65 ニシデの端で引き手は坂をあがってヤマを引く



1-63 ニシデの端に差し掛かる



1-64 オシミとオオテブリの同時進行



1-71 バランスを測りながら、ヤマを押し上げる



1-70 高さを合わせるため、石と木材を据える



1-68 イッチョモの角に差しかけたヤマ



1-73 徐々にヤマを回していく



1-72 対面でも側面からオオテブリを押ししていく



1-69 瓦に当たらないようにタゲの前後を調整する



1-74 ヤマが直るまであと一踏ん張り

は、地理的な位置関係に換えて表現される。これによって対面で伝達した時にも向きを間違えることはなくなる。

もつとも、役員やテブリに緊張を強いるニシデの街並みも様変わりしてきた。先に述べた店舗の閉鎖に加えて、家屋そのものが取り壊され、更地になった所が目立つ。道の両側に迫っていた軒もなくなり、直接、皆月の海が見える場所さえある。運行は容易となり、撮影ポイントも増えた。そのことと皆月の集落が痩せていくことは、裏表の現実である。

イッチョモの角

通りを北の端までくると左折九十度の方向転換を二度繰り返して、海側の二車線の道路（海岸道路）を目指す。最初の曲がり角では、通常のオオテブリとは異なる方法を用いる。ヤマの前方に家屋があるため、本来の位置にオオテブリを差しこむことができない。そこでヤマの前後の車軸を外側から固定する部材の下にオオテブリを差し入れる。高さを合わせるために辻の端に置かれている石と木片を積み重ね、ヤマの外側に置き、支点として利用する（写真1-70、71）。

これまでオオテブリは第二のテコの原理を利用していった。ここでは第一のテコの原理を利用してヤマの方向転換を試みる。ただし、第一のテコの原理では、ヤマを垂直方向に浮かせることしかできない。ヤマの前方または後方から、水平方向の移動を支援する必要がある。

この歌詞に登場する藻浦は、ニシデの北に位置する海岸部の名所であり、通ヶ鼻は、ニシデの沖の皆月湾と外海との境界あたりをさす。いずれも、このニシデの浜周辺の景観を歌い込んでいる。ヤマが海に面

ある。このため、オオテブリは必ず二本用いる(写真1-72、74)。二本のオオテブリは、呼吸を合わせてヤマを揺らしながら、水平方向に移動させていく。ある程度ヤマが方向を変えてくると、オオテブリの片方は車軸の前に移り、ヤマを回すことになる。

海岸道路

方向転換が終わるとオオテブリは直され、引き手たちも配置につく。音頭取りの木遣が響くが、このあたりで好んで用いられる歌詞がある。

ここは藻浦か通ヶ鼻か お六だおしがなつかしや



1-79 タケを立てはじめるヤマ



1-80 一年ぶりに再開する人も多い



1-81 休憩する若い衆に御神酒が回される



1-75 海岸道路に向けて運行が始まる



1-77 海岸道路にてたヤマ



1-76 海岸道路の向きに綱を引く



1-78 テブリだけで回りきれるか?



1-88 ヤマに飾られた人形



1-87 人形をのせる



1-83 テブリも余裕がある



1-82 海岸道路を進みはじめる

ヤマに飾られる歴代の時代人形。普段はその年のNHKの大河ドラマの主人公とヒロインをモデルにして制作される。ただし、近代のオリンピックをテーマにした2019（令和元）年は、大河とは関係のない時代人形が作られた



1-89 西郷どん



1-86 所定の位置まで行くと海側にヤマを寄せる



1-84 新参者へ指導中



1-85 ベテランによる『模範演技』



1-90 おんな城主直虎

1-91 利家とまつ



1-92 奉灯や鳥居が据えられた御仮屋前

近年では、この場所からヤマに武者人形が飾られるようになった。ほぼ毎年、NHKの大河ドラマの主人公とヒロインに見立てた二人の人形が飾られる。この後、ヤマの運行は、午後五時の再開まで行われぬ。ただし青年会員たちは、引き続き御仮屋近辺での旗ギリコ、鳥居、御幣ギリコ、ボンボリの設営を行うこととなる（『準備編』二、三、四章を参照）。

再開後、ヤマは、道幅の広い海岸道路を進む。運行に高度な技術は必要とされないため、近年ではテブリ初心者（写真1-84）の練習の場となることがある（写真1-84）。ときには往年の名手が、昔取った杵柄ならぬ昔取ったテブリ柄を、愛おむように扱いながら、ヤマを進める姿をみることもある（写真1-85）

かつてニシデの細い道を慎重に移動した頃は、この場所につくまで時間を要した。現在は、前述のような理由で比較的早い時間にこの場所につく。休憩時間も、少し余裕を持つことができる。タケの立て直しが終わり、御神酒が一段落したのを見計らい、会長はドットコの台図を送る。

1-79。宮の坂で折れたタケの代わりにあらかじめ用意されていた予備のタケを用いる。シタヤマに保管していたハタや吹き流しを予備のタケに括りなおして立てる。

テブリの技術継承

「今年こそやってみるか」。その一言から筆者へのテブリの技術継承は始まった。令和最初の夏のことである。

もともとテブリには練習、リハーサルといった場面は、設けられていない。性格上設けられないといったほうが正解である。本番を通して技術を習得していくしかない。そのような場面でかけられた声に素直に「はい」とは言いにくかった。「他に適任者がいれば私のようなものがやることはなかったのに。まだフリーの立場で祭りを楽しみたい。」そんな思いが胸中を掠めた。

しかし、人材不足の中での技術の継承に待ったはかけられない。祭りの運営全体にとっても必要なことと自分に言い聞かせる。結果として筆者は、今回の祭り全行程の約三分の一の区間、前ヤマのテブリを握ることになった。これまで海岸道路などでテブリを扱う機会があったが、これほど長時間、ヤマと相対したのは、今年が初めてであった。ただし三分の一といっても、比較的難易度が低い、初心者がその役割を担える場所に限られていた。

テブリの役割は、本文で述べたように「方向修正」と「速度調整」である。「方向修正」はテブリのもつとも重視する仕事である。道のゆるやかなカーブや起伏、時には九十度の方向転換に際しても、車輪にテブリをかませていくことで、ヤマを回すことが可能である。その際のテブリの扱いは、経験がものをいう。テブリが浅いといつまでも方向修正できず、車輪がテブリに乗り上げて進むだけである。深すぎるとクサビや車止めの形状のため、ヤマの進行自体を止めてしまう。テブリは左右に一人づついるため、相手の所作も考慮しなければなら

スを崩す。最悪、タカヤマからの落下事故につながることもある。

方向修正にオオテブリが必要となる事態になっても、オオテブリを扱う者たちはタカヤマでヤツサーの真っ最中である。たとえ人手が確保できても、荷重のかかった前方をオオテブリで方向修正することは困難だろう。この場面でのテブリは修正が許されない。そのプレッシャーはテブリの操作に重くのしかかる。下り坂のために速度が平地より早いことも、さらなる重圧となる。これらは熟練者の技術と自信がなければむづかしい。

もう一つの「夜間」は、ヤツサーほど困難な要素を持っていないものの、やはり、初心者には難度が高い。テブリは、多くの情報を知ら



①-1 宮の坂で鳥居前でのテブリの操作

ら得て、現在の位置を知り、修正すべき方向を決定する。しかし、夜間での運行で、視覚から得られる情報は極端に少なくなる。車輪の周辺には役員手持ちの弓張提灯がつくが、わずかな光で照らされる部分は一部に限られる。限られた情報をもとに判断し、方向修正を行わなければならない。現在位置を確認する目印を自分の感覚で見つける必要がある。視覚以外にも声や音による聴覚、移

ない。一方がテブリを入れた時、こちらが外さなければヤマが進まない。引き手の勢い、後ろヤマでの所作など、刻々と変わる状況にも常に判断が求められる。これらは実際に先輩の助言や呼吸を合わせることで覚えていくしかなかった。

問題は、「速度調整」である。今回、こちらに関して私の技術では貢献できなかったと考えている。速度調整は、文字通り早すぎるヤマの進行を遅らせるために行う。頭の中の理解では、次のような順序が思い浮かぶ。車輪の一方にテブリを入れた後、すかさず反対方向にも同じ量のテブリを差し入れる。最初に入れたテブリで変えられた方向を反対方向に入れた二度目のテブリで元に戻す。結果として方向は変わらず、二度テブリを乗り越えることで前進するエネルギーが吸収され、速度が落ちるというものである。今回に関しては初心者ゆえ技術的に実行が不可能であったこともあるが、オシミによる適切な速度調整が行われたことで、実際に筆者のテブリによる速度調整は実行されることはなかったのである。

難度の高い現場

次に筆者の関わることのなかった（できなかったというほうが正解か）難度の高い行程について述べておく。その代表的な場面が、「ヤツサー」と「夜間」である。

「ヤツサー」は、下り坂でタカヤマに多くの者を乗せる。彼らがタカヤマの前方で激しく暴れて、ヤマの前輪に多くの荷重がかかる。テブリを浅く挟み入れた程度では、方向修正に必要な横滑りはおこなえない。ヤマの車輪はテブリを乗り越えるだけである。テブリを挟み込む深さが、平地とは異なるのだ。他方であまり深く入れることもできない。車輪の横滑りが大きいと、ヤツサーを行っている者たちがバラ

動した速度や距離感など経験則にもとづく判断が必要とされるわけである。

これらの困難はある程度の経験を積むことにより、判断材料を得ることができ、解決できると考える。それによって全行程でテブリを持つことが可能になるのである。先達たちもそのように乗り切ってきたのだろう。

テブリの製作と加工に向けて

最後に、次以降のテブリの技術継承の課題を述べる。テブリの熟達者は、ほぼ必ず自分好みのテブリを選ぶ。かつては自ら作製したり、調整のために削ったりする者も多かった。これに対し、筆者は与えられたテブリがどのようなものであってもかまわない。どんな形状であれ思いのままに使ってみせる「弘法筆を選ばず」という意味ではない。どのような形状が自分に合うのかもわからないという意味である。テブリの何が方向調整の基準となり、自分の意図と合致するのかが理解できていないのである。テブリによる操作の理論はいたって簡単である。直進するしかない車輪に対し、斜度のあるテブリを挟み入れ、その斜面で横滑りを起こし、わずかずつ進行方向の軸をずらししていく。いかに自分の意図する横滑りを効率的に行うかは、テブリを自らの手足のように扱うことに左右される。

このためにより良いテブリの調達が必要不可欠となる。材料となるケヤキの木、それも二股になる枝の部分を市販のものから調達することはきわめてむづかしい。自然の材料の探索段階から、テブリ自体の製作、そして加工の手順についても、テブリの係として習得していく必要があるだろう。

2章 神輿の行列

神輿のお発ち

ヤマの運行に続き、日吉神社の神輿の渡御は午後四時に始まる。それに先立ち、係りの者一人が集落内に神輿の渡御をふれまわった。ヤマの運行前の子どもたちによるふれまわりと同じである。神輿の渡御前には、一定の抑揚をつけて、「神様 お発ちやぞー」という。かつてふれまわる係は、錫杖に似た棒を手に持ち、引きずり、地面を打ち

つげながら歩を進めた。時代によっては拡声器を用いた頃もあったが、現在は行われていない。

だいたい午後三時半頃になると、日吉神社の境内には神輿の行列に参加する旗持ち、大太鼓、小太鼓、神輿、区長と組親らが集まる。神職の準備が整うと彼らのなかで主だった者が、拝殿に上がり神事が始まる。皆月日吉社の式次第は、一般的な例大祭の式次第(典儀)に則って行われる。すなわち、修祓、祓詞奏上、大麻祓い、宮司一拝(一同)、



2-1 拝殿前の神輿



2-2 拝殿に集った行列の一行



2-3 祭りの神事が始まる

献饌、祝詞奏上、玉串奉奠、撤饌、宮司一拝(一同)、直会の順に進められる。

近年は、番場誠さんが齋主を務め、長女の夏希さん、次女の美緒さんが神事の補佐を行う。玉串奉奠では、区長以下組親の他に猿田彦役や神輿の担ぎ手(現在は押し手)の代表も用意された榊を奉奠する。直会では禰宜によって、参加者たちに御神酒が回される。

神輿の行列

神事がすすみ、神輿に御霊入れが完了すると神輿の渡御が始まる。大太鼓が境内に響く。御霊入れは、神社の本殿に鎮座する日吉神社の

御神体を神輿に遷す神事である。

神輿の行列は、天狗(猿田彦)、旗持ち、大太鼓、小太鼓、神輿、神職、袴を着た区長と組親、最後に再び、旗持ちとなる。断続的ではあるが、二〇〇〇年代後半までは、天狗の後に神馬が続いた。皆月に馬はいないため、能登の他地域や金沢などから皆月区が費用を捻出して借りていた。しかし、近隣に馬を貸す場所がほとんどなくなり、あまりに費用もかさむため、現在は神馬自体を出さなくなった。神馬がいた頃は、宵祭りのクライマックスである御仮屋前と本祭りの宮の境内で馬駆けが行われていた。馬駆けとは、居並ぶ引き手や若い衆の間を神馬が三往復する行事である。勢いよく走り抜ける馬の背を男たちが叩いていく。こうやって馬に触ればその年は無病息災



2-4 玉串を奉納する区長



2-5 各組親も順に奉納する



2-6 神輿に御霊を遷す



2-9 小太鼓：3人が一組で太鼓を叩く

2-8 大太鼓（山王権現太鼓保存会）



2-7 天狗（猿田彦）と旗持ち（行列の前）



小太鼓 現在、小太鼓は、三人が一組となって、締め太鼓を持ちながら叩く役目を担う。祭りの法被を着た三名は、神輿の渡御中、

なる説明かもしれない。

皆月の祭り太鼓は、二人一組で打ち鳴らす。一人はジを打ち、もう一人はそのジに合わせて自分のリズムで叩く。このジを皆月ではドンドコともいう。能登の他地域の多くがドンドコ太鼓といってジは左右を交互に打ち続けるのに対して、ドンドコでは、片手で二度続けて打ち、その後、もう片方で一度打つ。リズムで言えば、ドンドコが二度、コで一度、叩くイメージである。保存会の会員のなかには、ドンドコ太鼓は守りの太鼓で、ドンドコ太鼓は攻めの太鼓と表現する者もいる。これは、近隣の輪島の御陣乗太鼓の由来にもつながる説明かもしれない。

に結びつけている。これはかつてこの丸太を肩に担いで移動した頃の名残りである。現在もこの丸太を押しながら、太鼓の移動を行っている。

一九九〇年代の終わりまで、大太鼓も皆月以外の七浦地区から人足を頼んでいた。人手不足も配慮して、皆月の有志が山王権現太鼓保存会を結成したのが一九九四（平成六）年のことである。皆月在住の青年会のOBが中心となり、祭りの大太鼓を担当するようになった。現在は本町の近江順志さんが会長を務めている。

この会では、一五年ほど前から地元の子に太鼓を教えるようになった。彼女たちが小学校高学年から中学生になった頃から、祭りの太鼓に参加するようになった。二〇〇六（平成一八）年頃のことである。彼女たちは成人しても積極的に大太鼓に参加しており、ヤマと同様に白装束をまとうようになった。彼女らに続いて、皆月の女子が保存会に参加して太鼓を学んでいる。現在では、行列の大太鼓の中心は女性が担っている。

天狗（猿田彦） 文字通り天狗の面に鳥甲をかぶり、鉾をもつ。神輿の行列を先導する役割を務める（図2-7）。記紀神話に登場する猿田彦の神が、高天原からの天孫降臨に際して、天の八街にて先導役を務めたというエピソードにならったものである。神輿の先導を猿田彦が務める形式は、他地域の多くの祭りでもみられる。なお天狗の役は、後にのべる神輿の引き手とともに皆月以外の方に依頼している。近年（二〇一七年から）は、中谷内の井上孝雄さんが担当している。

旗持ち 旗持ちは、太いタケに括られた赤地のハタを持って行列に参加する。かつて旗持ちの役は行列の前方に一〇人、後方に一〇人の計二〇人が参加していた。皆月内の一〇の各組から二人ずつ参加することが決まっていた。しかし、二〇〇〇年からは村内の負担を減らすために、前方五人、後方五人の計一〇人に半減することになった。炎天下での旗持ちの係は基本、肉体労働であり、役割負担と受け止められている。

現在は、男女関係なく、当番となった人足が受け持つが、かつては主に皆月の女性が旗持ちの役を担っていた。当時の女性にとつて旗持ちに参加することは、誇らしいことでもあった。彼女らのなかには、この旗持ちのために夏用の着物を新調していたという話も聞かれた。当時は、祭り夜の呼びびき（家ごとに親戚や友人を呼ぶ宴席）のための料理や酒の準備に追われ、主婦たちが祭り行列をみる余裕などなかったと語る方も多し。女性にとつては、旗持ちが祭りに参加し、行列を実感できる数少ない機会だったのかもしれない。

大太鼓 一尺六寸（約四八センチ）の大太鼓を車輪のついた補助台に乗せて移動する。太鼓は、胴の横の環に縄を通して太めの丸太



2-12 区長と組親

皆月では区長の他に10の組から組親が選ばれて、皆月内の課題を検討し、指針を取り決めていく。本来なら行列にも、区長と組親を合わせて11人が参加するはずである。しかし、毎年、忌がかかったり、本人の体調がよくなかったりして、全ての人数が揃うことはほとんどない。また、かつては袴での参加が多かったが、今は、略式の小忌衣で参加することが多い。よってここでは、撮影が可能な主な組親たちに登場してもらった。

なお、上記の画像の多くは、神事のみとなった2020（令和2）年の祭りの際に撮られた画像を加工している。この年は新型コロナウイルスのために曳山や神輿の行列を出すことができなかった。組親の多くがマスクをつけている様子は、良くも悪くもこの年を象徴した姿と言えるだろう（中央の伏見孝一区長の姿は、2019年に別に撮影したものである。なお、撮影については、この年の青年会長、升本一理さんと4組の組親の貫山敬さんの協力を得た）



2-11 神職（番場家）

この後、再び、五人の旗持ちが続いて行列をしめる。なお、神輿に関わるハタは二種類ある。一方の旗はすでに述べた旗持ちの赤いハタである。赤布の周囲の縁の補強部分とチチは、黒地になっている。

他方の旗は、白地に四神が描かれており、計四本からなる。各々の旗の下面には青龍、朱雀、白虎、玄武の四神の絵が配されている。旗には、旗布の上部に木材を取りつけ、その木に紐を通して黒塗りの旗竿に吊り下げ、風になびかせる形を取る。こちらの旗は、行列には参加せず、直接、御飯屋に運び込み、御飯屋前の所定の場所にしておく。

袴姿で続く。袴は、江戸時代の武士の礼装を模したもので、肩衣に袴をつけた衣装である。写真2-12の皆月区長は、袴に一文字笠をかぶり、扇をさしている。かつては、区長以外に一〇組の組親の多くが袴で揃っていたが、現在では病気で参加できない者や忌がかかって参加を控える者が多く、当時のような迫力のある行列をみることはできない。

2-10 神輿とその一行



た神職が続く。

区長と組親 神職の後方には氏子総代を兼ねる皆月区長や組親が

神職 神輿の後方には、日吉神社の宮司、禰宜（番場家）とい

く、神輿の担ぎ手も、皆月以外の者が務めることになっている。一九七〇年代以前は、皆月の隣村である百成に担ぎ手を頼んでいた。後で述べる神様岩の伝説に百成のヨモという人物が登場しており、神輿の担ぎ手の由来として関連付けられることもあった。百成からは、獅子舞も登場し、神輿の行列に加わっていた時期もあった。その後、人手がいなくなったために百成からの人足は途絶え、同じ七浦地区の矢徳に依頼していた時期もあった。しかし現在では、先の猿田彦の役も含め、七浦の各地域の有志の者たちによって神輿の一行は成り立っている。この写真では、右から、筒井さん（中谷内）、三浦さん、室岡さん、東さん、五郎地さん（以上、五十洲）、角江さん（吉浦）の六人である。

神輿の担ぎ手も、皆月以外の者が務めることになっている。一九七〇年代以前は、皆月の隣村である百成に担ぎ手を頼んでいた。後で述べる神様岩の伝説に百成のヨモという人物が登場しており、神輿の担ぎ手の由来として関連付けられることもあった。百成からは、獅子舞も登場し、神輿の行列に加わっていた時期もあった。その後、人手がいなくなったために百成からの人足は途絶え、同じ七浦地区の矢徳に依頼していた時期もあった。しかし現在では、先の猿田彦の役も含め、七浦の各地域の有志の者たちによって神輿の一行は成り立っている。この写真では、右から、筒井さん（中谷内）、三浦さん、室岡さん、東さん、五郎地さん（以上、五十洲）、角江さん（吉浦）の六人である。

神輿 小太鼓に続いて、いよいよ神輿の登場となる。現在、神輿は三輪の台車に載せられ、六人の押し手によって移動させられる。かつてはこの神輿を担いで村の中を渡御していた。もちろん、人数も現在の倍以上の人を頼んでいた。

神輿の担ぎ手も、皆月以外の者が務めることになっている。一九七〇年代以前は、皆月の隣村である百成に担ぎ手を頼んでいた。後で述べる神様岩の伝説に百成のヨモという人物が登場しており、神輿の担ぎ手の由来として関連付けられることもあった。百成からは、獅子舞も登場し、神輿の行列に加わっていた時期もあった。その後、人手がいなくなったために百成からの人足は途絶え、同じ七浦地区の矢徳に依頼していた時期もあった。しかし現在では、先の猿田彦の役も含め、七浦の各地域の有志の者たちによって神輿の一行は成り立っている。この写真では、右から、筒井さん（中谷内）、三浦さん、室岡さん、東さん、五郎地さん（以上、五十洲）、角江さん（吉浦）の六人である。

一定のリズムで太鼓を叩き、それに併せて「山王祭りよい」と囃す。これに神輿の台車をおす者たちが「さーらばひやせ」と呼応しながら、神輿は進行していく。

小学校低学年の女子が担当している。こちらも、時期によって担当する者が変わってきた。一九九〇年代までは、百成など他のムラの小学生が参加していた。また、基本的には男子が担当していた。二〇〇〇年代以後は男女を問わず、皆月だけでなく、ムラの出身者の子供や七浦の子弟が小太鼓を叩くようになった。



2-20 区長と組親、この頃はまだ袴が多い



2-19 ニシデをいく天狗と旗持ち



2-22 イッチョモの角まできた神輿



2-21 ニシデをいく神輿



2-23 海岸道路に出て北にあがる天狗と旗持ち



2-24 キヘイの神様岩

漂着神 往古皆月海岸に一木像漂着し来り、喜兵衛の下なる狭み石にかゝれり。百成ヨモなる者、謹みて拾上げ奉り、皆月神主番場氏に託し、山王権現として之を奉祀せり。今も番場氏と百成大角間村氏との間に特殊の密接なる関係あるはこれが爲なりといふ。或は場所に据えられたのである。この岩には、皆月の神様の由来を説く漂着神の伝説が語られている。一九二〇(大正九)年に発刊された『七浦村志』には、次のように記されている。

神様岩は、海岸道路ができる前は、港のそばの海岸近くにあった。海岸道路が敷設された際に、キヘイ(政木家)の家の横に移設され、写真2-24のように周囲も整えられた

神輿の出発した一行は、宮の坂を下り、ニシデを北に進む。通りには神輿の渡御を待つ高年齢の村の人も見かける(写真2-17)。家の多くは、祭日の暖簾を玄関に飾り、提灯を用意する。以前よりも少なくなつたが、太鼓の響きや子どもたちのかけ声を聞きつけ、通りに顔をだす人も多い。
ニシデの端まで行き、海岸道路を出るとそこから神輿の一行は、ヤマとは異なる方向に向かう。村の北の端にあるキヘイ(政木家)の隣には、神様岩という岩があり、現在はコンクリートで補強されている。元は海岸近くにあったが、海岸道路の敷設に際して、この

神様岩

神輿の渡御は、ヤマの経路と基本的には同じである。先触れとしてのヤマが通った後には、通り沿いの家人が道の真ん中に塩を置いて浄める。



2-13 宮の坂をくだる大太鼓



2-14 坂の下までおりてきた一行



2-18 ニシデに入った一行



2-17 神輿を待つニシデの御年寄



2-15 小太鼓と神輿の様子



2-16 村の中に入る、小太鼓の衣装は複数ある

写真2-17,18のように道には、点々と白いモノが続いている。これは、神輿の渡御に先立って浄めの塩を置いたものである。沿道には神輿を腰掛けてまつお年寄りの姿もある



2-27 神様家への神事、左に見えるのが神様岩



2-26 神事の間、休憩する行列の一行



2-25 村の北の端についた神輿の一行



2-31 神事を行う神職



2-30 神事の様子



2-29 大太鼓の打ち手たち



2-28 神輿の押し手による太鼓



2-32 神輿への御供え



2-33 神主と政木家当主の直会

いる世代も少なくなりつつある。
次にこの語りとはやや異なる話として、岩に漂着したカミとキヘイ（政木家）についての物語が記される。漂着したカミは小童と化して、キヘイの家で三年間、仕えたとされる。その後、シヨウザ、すなわちデムラにある升本家でも三年間働き、その後、日吉神社に鎮座して、山王権現として祀られたという。このキヘイは村の北端に、また、シヨウザは村の南端に位置している（シヨウザより南にも世帯はあるが、行事自体は南端で行われる）。その意味で、これらの伝説は漂着神の由緒を語るとともに、祭りでの渡御を通して、村の境界を再確認する役割を果たしている。

これによるとまず、皆月の隣村である百成のヨモという人物が、最初に岩に漂着した御神体を見つけ、神主の番場氏に託した。このような経緯から「番場氏と百成大角間村氏との間に特殊の密接なる関係」があるという。このエピソードは、先に記した神輿の渡御に際して、百成大角間の人足が参加する理由として語られたこともあった。またかつては番場家で人が亡くなると、その墓を掘る役目も百成大角間の人であったとされる。最も祭りに百成の人たちが出なくなると数十年が経過しており、このようなエピソードを聞き知って

云ふ、喜兵衛の下なる海濱に一小匳の漂着したるが、忽ち化して十五六歳の小童となり、喜兵衛の家に仕ふること三年、更に庄佐に轉じて仕ふること亦た三年なりしが、後ち再び化して山王権現となりたりといふ『七浦村志』七浦小学校同窓会編、一五二ページ）。

キヘイ（政木家）の前に到着した神輿の一行、神輿を神様岩の横にすえ、神事が行われる。神輿の担ぎ手や太鼓の一行は式次第を見守る。神職と区長、組親は式を終え、直会となる。大太鼓の中心は女子が受け持つが、太鼓好きが自らの技を披露することもある。写真2-28の神輿の押し手たちは、太鼓の名手でもある

御神酒係と会計

祭り当日の青年会の仕事に御神酒と会計の係がある。役員のなかで、地味に重労働を強いられるのがこの係である。御神酒係は、文字通り、ヤマの小休止の時に振るまう御神酒を用意する。会計は常任の役員で祭りだけでなく、年間を通じて青年会の予算を預かる。祭りの期間は、主に奉納される御神酒や奉納金を記録する。記録のためのノートや預かった奉納金を入れるカバンを常に携帯している。

地味な重労働

地図に示したように御神酒が振舞われるのは、宵祭りが六回、本祭



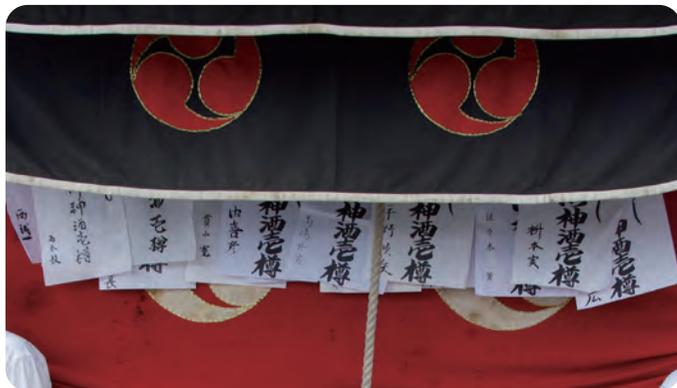
②-1 御神酒係と会計



②-2 小休止で御神酒が出される場所

りが五回の計一一回である。最初のミズバタには、祭りが始まる前に、御神酒と樽を用意しておく。かつてはミズバタの角の家の土間に置かせてもらっていたが、家人が不在となったため、ミズバタの端に置いてある。同様に御神酒のストックや樽をおかせてもらっていた複数の家が不在になっており、役員の頭を悩ませている。ヤマが宮の坂をおりてきて、オオテブリを回している頃、御神酒係たちは、一升瓶から樽に御神酒を移しかえる作業をはじめ。一升樽は六つあり、参加者に振るまわれる。近年は、樽に移し替えるためにルートが常備され、御神酒を運ぶための荷車が配備された(写真②-1,6)。

これ以後も御神酒係は、各々の場所にヤマが来る前に先回りして、樽に御神酒を入れておかねばならない。御神酒は一度で終わらず、



②-4 面幕の下のタケに結わえられた御神酒の熨斗紙。②-3 御神酒を樽へ。近年はルートが常備され、こぼさずスピーディになった



樽のお代わりを要求されることも多い。これらの対応も係の者が随時行う。ヤマが動きだすまでに樽を回収するのも一苦労であった。酔いの回った引き手のなかには、なかなか御神酒を手放さない者も多かった。見切り発車で会長がドットコの指示を出し、ヤマが動きだす。運行中



②-6 デムラにて御神酒と樽を運ぶ



②-5 御神酒の熨斗紙

に他の役員とチェックすると樽の数が合わない。ヤマの前後を確認し、一つ前の休憩場所まで戻っても見つからず、結局、誰かがシタヤマに投げ入れていた、といったこともよくある話である。

新調された御神酒樽

現在、使っている六個の御神酒の樽は、二〇一三(平成二五)年に島本昭次さんによって制作された。当時、青年会も樽の老朽化には頭を痛めていたが、代替品を調達する目処もたたなかった。この状況を打破してくれた島本さんの酒樽に対する思い入れは強く、その評価は会員の中では高い。

御神酒は、ヤマが家の前を通過するときには家人から青年会役員に奉納される。緑側に台を据えて、その上に置かれる場合もある。一升瓶には「御神酒一樽」と書かれた半紙のし紙として付けられている(写真②-1,5)。会計はこの紙をチェックし、のし紙は、役員によってどの家から奉納があったのか記録された後、ヤマの前に吊るされたタケに括りつけられる。(写真②-4)。

ちなみに会計の仕事は祭りが終わってからも続く。奉納金の確認はもちろん、テブリや音頭取り、準備に携わってもらった方へのお礼の差配は会計が中心となって、祭りの翌日(一二日)に行うことになる。会計報告は、夏と冬に行われる総会のうち、冬の総会に提出されている。

3章 宵祭り 曳山午後

ヤマの再開

ヤマの曳行は、午後五時に再開される。ここから引き手たちは揃いの衣装で集まる。白のワイシャツ、白のトレパンで上下を白で統一している。ふくらはぎまでは脚絆(ゲートル)を巻き、足元は白足袋に草鞋をはく。頭には日吉神社の三つ巴を赤く染め抜いた手ぬぐいを鉢巻にしている。

ゲートルの巻き方や紐の結び方には、家の流儀や個人のこだわりが



3-1 ヤマの白装束



3-2 伏見前のヤマの出発する前の様子

あるようだ。もともとゲートルは軍隊で利用されていた。家族や親族が第二次世界大戦中、海軍と陸軍のどちらに従軍していたかが、その巻き方や紐の結び方の違いから見取れたという。近年、ゲートルは、新たに入手することがむづかしい状況になっている。

また、若い衆の多くは、ワラジと白足袋を、二足ずつ新調する者が多い。各々を宵祭りと本祭りに利用するためである。後で述べるヤッサーや御飯屋での一連の行事のため、ワラジはすり減り、足袋も泥だらけになることがわかっているからである。

曳きははじめられたヤマは海岸道路を進み、御飯屋の横をかすめるようにデムラ方向へ向かう。御飯屋周辺には、ヤマの進行方向を遮るよ

うに旗、旗キリコ、鳥居のオシミとなるロープが張り巡らされている。ヤマの通過に際して、ロープを一旦外して、移動のスペースを確保しなければならぬ。もちろんロープがゆるめば、旗や旗キリコが倒れてしまう。ロープがゆるまないように張りを維持しておく人員も必要である。彼らは、ヤマが通過した後、各々の場所にロープを再固定する作業もこなしていく。

オシミの固定状況によっては、一〇名程度の人手が必要とされる。会長や役員は、タイミングを見計らい、ヤマのオシミに付いている若い衆を、御飯屋の方に向かわせる。ヤマを滞らせず、通過させるためには、人数とタイミングに注意しなければならない。



3-3 午後の曳きはじめ



3-4 海岸道路をいくヤマ



3-5 御飯屋に差し掛かるヤマ



3-7 タカヤマの夕ヶにも気を配る



3-6 御仮屋の横を通るヤマ



3-10 鳥居のオシミ



3-9 ヤマとオシミを張る若い衆



3-8 旗、旗ギリコのオシミ

御仮屋横を通過すると、ヤマは皆月川にかかる皆月新橋（以下新橋）を渡りデムラにはいる。この新橋と海岸道路が建設されたのは一九七八（昭和五三）年のことである。

それ以前のヤマの経路は、ニシデから皆月川を超えてデムラの端まで砂浜を移動していた。重量のあるヤマは、そのままでは砂浜を走行できない。自重で砂にめり込んでしまうからである。砂浜を運行させるためには、スジと呼ばれる道具を用いた。スジは、長さ三メートル弱、幅三十センチメートル、厚さ四センチメートルほどの木板である。このスジを左右の車輪の下に敷くことで車輪の埋没を防ぎ、ヤマの運行を行っている。海岸道路の建設により、浜での曳行は行われなく

3-8~10 御仮屋の旗や御幣ギリコのオシミを一時的に外して、ヤマの道を作る。タカヤマにも数人があがり、タケを揺らしてロープが絡まないようにする



3-15 再び進みだすヤマ



3-11 コウハク前まで進んだヤマ



3-13 前ヤマの様子



3-14 後ろヤマのオオテプリ



3-12 休憩にはいる



3-16 前網の引き手たち

コウハクの前から動きはじめたヤマ。この時間になると各家から白装束の男たちが集う。3-15の後方に見えるように年によっては、この辺りですでに神輿の一行がヤマに追いついていることもある

新橋を越えてデムラの方を向いたところで小休止となる。この時は、オオテプリを出さずにヤマを回し切ることも多い(3-11)。休憩になるとヤマの後ろに2本のオオテプリが並べられて御神酒がまわされる(3-14)。ヤマの車輪と同じくオオテプリも御神酒で浄められる



3-22 夕ヶを倒す



3-21 デムラの集落内から見たヤマ



3-17 ゆるやかな坂をのぼるヤマ



3-18 ヤマに追いついた神輿行列



3-23 全ての夕ヶを倒して固定する



3-24 後ろヤマでの休憩の様子



3-20 デムラの通りに入る



3-19 海岸道路でオシミをひく若い衆

なつたが、過去の祭りでは、二日間の祭りを通して計三度、この皆月川を越えていたことになる。
海岸道路
皆月川の新橋を越えたところで、ヤマは御神酒（小休止）になる（写真3-13、14）。場所は直近の家の屋号にちなんで、コウハク前と呼ばれる。この場所には、翌日の本祭りでも小休止することになる。休憩

は程なく終了し、ヤマは、海岸道路を進んでいく。ここからデムラの村内に入るまでは、二車線の道路を進むため、ヤマはスムーズに進んでいく（写真3-19）。
宮前の前、あるいは貯水池横と呼ばれるデムラの集落に入ったところで、再び御神酒（小休止）となる（写真3-24）。道が急に狭くなるため、テブリが慎重にコントロールしながら、ヤマをデムラの中に導いていく。

ここからは、午前中のニシデ集落内を運行した時と同じように、ヤマは向かい合う家々の軒先をかすめるように進行する(写真3-28)。また、奉納する御神酒を縁側に用意している家もみられる(写真3-25)。ただデムラは、ニシデよりは若干道幅は広く、その分、テプリの緊張も和らぐ。ただし、次の小休止の直前には、テプリにとって大きな見せ場が控えている。茶木家の前に至るまでには、今出川を跨ぐようにゆるいS字のカーブがある(写真3-29)。ここをオオテプリを使わず、テプリだけで通過することが彼らの密かな矜持である。

S字の最初のカーブに向かう前、テプリの二人は、ヤマの向きを一旦、カーブの外側に向ける。ヤマはカーブの曲線どおりには曲がらない。よってテプリによる方向修正も、車などの修正方法とは異なる。あらかじめ曲率半径を大きく取り、二つ目のカーブを余裕をもって曲がれるようにする(写真3-30)。S字の後半部では、カーブの手前から早めにテプリを入れて、ヤマの向きを直していく、この時にはヤマの後輪にもテプリが入ることが多い。上述したようにテプリだけの方向修正は、その使い手にとって至上の喜びとなる。



3-29 今出川の手前でコースを見定めるテプリ



3-30 今出川にさしかかったヤマ



3-31 ヤッサーに備えて刃物や余計なハタを片付ける



3-26 音頭取りに合わせる引き手たち



3-25 縁側で御神酒を用意してヤマを待つ

午前中にヤマを止めた「伏見」前やこの「宮前」前、この後にヤッサーが行われる「茶木」前などは、いずれも最寄りの家の苗字が用いられる。他方でニシデの角の「イチチョモ」や新橋のたもの「コウハク」、提灯をつける「ショウゴロウ」下などは、最寄りの家の屋号が使われている。祭りのポイントとなる場所は、村の家々の名と祭りの行事内容を重ね合わせつつ、記憶され、身体化されるわけである。

デムラ

ちなみにデムラには、二軒の旅館(川島、春田)、建設業(六郎木)、豆腐製造(伏見)、書店・雑貨店(久保)、理容室(宮前)、農協、薬局(杉下)、ユースホテル(中室)、民宿(相上荘、猿山荘)、スポーツ・雑貨店(松下)、美容室(金谷)、駄菓子屋(ナナオ)、酒・雑貨店(升本)、畳製造(有賀)があった。しかし、現在では、宮前理容室と升本酒店の他は、事務所を隣接する集落、鶴山に移した建設業が営業をするのみである。

小休止の間、タカヤマでは、飾りつけられていたハタダケとダンダケが倒されて、横向きにされる(写真3-23)。電線が横切る集落内を通過するためである。タケを倒す前には、タカヤマから二体の武者人形もおろされる。またこの辺りで、旗持ち、大太鼓、小太鼓をはじめとする神輿一行の行列が、ヤマの後ろに合流する。曳山を先頭とした山王祭の行列は、前後約二〇〇メートルほどに伸張する。



3-28 デムラを進むヤマ



3-27 引き手の端でツナをまとめる



3-38 新しい世代の台頭



3-37 熱気に満ちたタカヤマ



3-34 動き出したヤマ



3-33 ドットコの前から囃し立てる



3-32 タカヤマにあがった若い衆



3-40 デムラの端まできたヤマ



3-39 最後まで暴れるタカヤマの若い衆



3-36 老若関係なく盛りあがる



3-35 休憩する引き手たち

ていた高校生から三十代までの若者が中心となる。彼らがタカヤマに上がり、「ヤッサー、ヤッサー」と声をあげ、狂喜乱舞する。三名から四名が横に並んで肩を組み、およそ四メートルの高さのヒヨコダシの最上部に立って、足を上げ、飛び跳ねて暴れる。「ヤッサー」は、その壮観さと裏腹の危険性から参加する者、見る者の両方にとって、皆月山王祭で最も盛りあがる場面である（写真3-32、34）。

ヤッサーで最も目立つのは、最前列で暴れる若い衆である。しかし、彼らが暴れるためには、その背後の支えが必要となる。下からは見えないが、彼らの後ろには二重三重に若い衆が重なっている。二列目の者たちが最前列のベルトを持ち、三列目の者たちが二列目のベルトをもつ。彼らは文字通りベルト持ちと呼ばれる（写真3-37、38）。ベルト持ちは、斜面になっているダシダケの滑りやすい足場で踏ん張りながら、前の者のベルト（トレパンも含めて）を必死に握りしめる。彼らは両手を使い、複数のベルトを握るようになっている。誰か一人の手が離れても別の者がフォローできるからである。ベルト持ちに長けた者の中には、前に出張った若い衆があまり騒いでいない時には、故意に押し出して、盛りあがるように間合いをはかる者もいる。

このヤッサーは茶木家の前に始まり、現在はデムラの端に位置する有賀家の前で終わることとなっている。ただし、かつての終了地点は現在の場所より五十メートルほど先まで行われていた。集落を出ると道は

ヤッサー

テブリの卓越した操作で、ヤマは茶木家の前にたどり着いた。余勢を駆ってオシミの若い衆は、ヤマを引き戻そうとするが、ヤマは動かない。程なく彼らも、オシミから離れて次の見せ場へと移行する。「ヤッサー」である。

引き手たちもここで小休止となり、御神酒が回される。この小休止は、単なる御神酒の時間ではない。タカヤマでは次に行われるヤッサーの準備が着々と進められる。まず、横に倒されているハタダケとダシダケを、ダシオコシのロープにオリナワで結わえつける。天守閣を飾るシャチホコを取り外し、シタヤマにおろす。ただし、シタヤマには小学生が乗り込んでいる。子供たちが突起状に彫られたシャチのウロコ部分で怪我をしないように、予備のハタを巻きつける。また、オリナワを切る作業のためにタカヤマに置かれている数本の鎌も、シタヤマに降ろされる。こちらも刃の部分をハタで巻いておく。

作業が終わわり、御神酒も十分行き渡った頃を見計らい、会長は再開に向けて各所の確認を行う。ヤッサーの際は、引き手やテブリの前に、タカヤマでヤッサーが行われるに十分な人員がいるか、その安全対策は十分かを確認して、音頭取りにドットコの合図を出すのである。

ヤッサーは、後ろヤマでオオテブリやオシミに集つ



3-46 海岸道路でのUターン、皆月湾が開ける



3-42 軽くなったヤマは少しベースをあげる



3-43 後ろヤマとオシミ、心なしが数が少ない



3-41 デムラの端で若い衆はおろされる



3-47 後ろヤマのオオテブリ



デムラの端のU路を回るヤマ。テブリ、オオテブリ、引き手、役員たちが一丸となってヤマを回す



3-44 ハザに囲まれた道をいく



3-45 ここからがテブリの見せ場

開け、稲を干すハザを立てる広場越しに海岸道路が見えてくる。この間の約一〇〇メートルは、目立たないがゆるやかな下りとなっている。気をつけないとヤマに勢いがついてしまうため、テブリが深く挿されることがある。反動でヤマが大きく揺れ、その衝撃でヤマから落下する者もいた。特に二〇〇四（平成一六）年には、祭りの花形の青年会員が、ヤマから落ちて大怪我をおおきてしまう。結果として、現在のように集落を出たところで、若い衆はヤマから降りることが決められた。

ところで、この「ヤッサー」という掛け声は、それほど古くから定まっていたものではない。それ以前、タカヤマでの掛け声は、オシミを引っ張るときと同じ「エイヤツ、エイヤツ」のテンポをやや早く



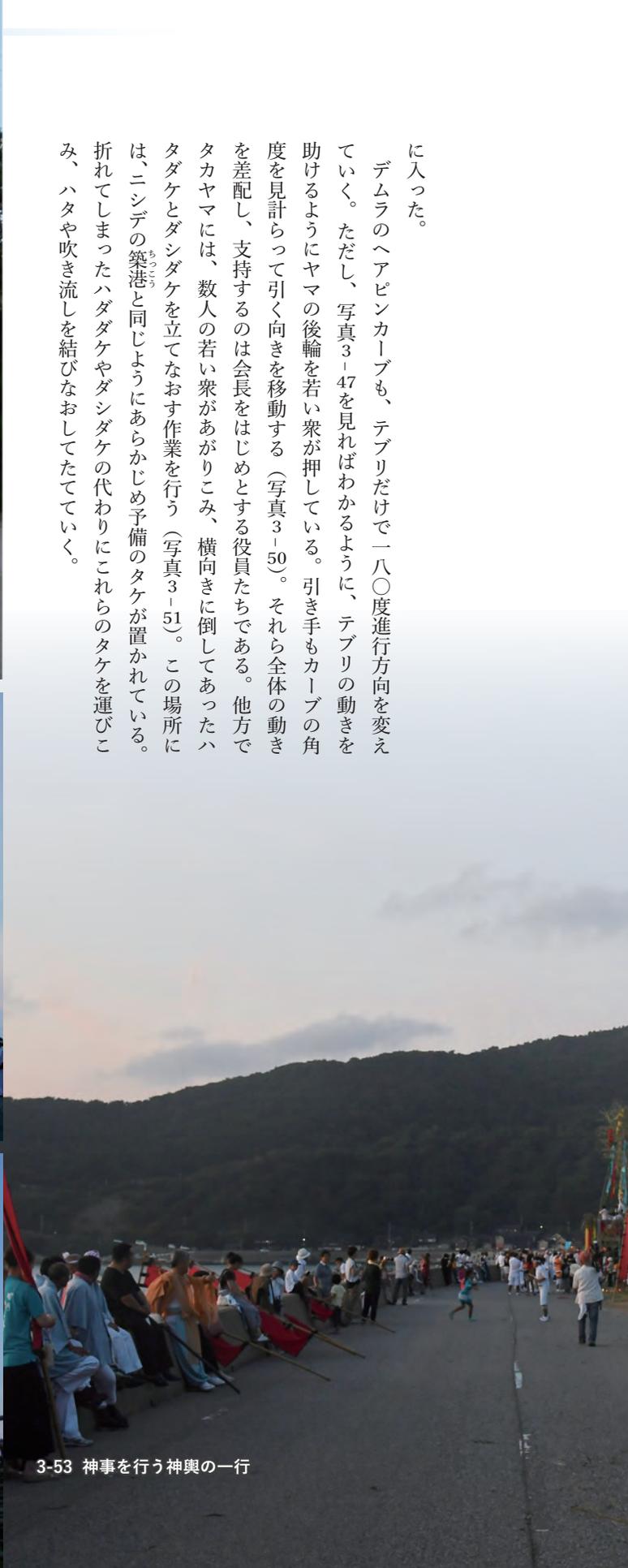
3-50 引き手の向きを変えてヤマを回す



3-51 タカヤマのタケを立てる



3-52 海岸道路を村内へと折り返す



3-53 神事を行う神輿の一行

に入った。
 デムラのヘアピンカーブも、テブリだけで一八〇度進行方向を変えていく。ただし、写真3-47を見ればわかるように、テブリの動きを助けるようにヤマの後輪を若い衆が押している。引き手もカーブの角度を見計らって引く向きを移動する（写真3-50）。それら全体の動きを差配し、支持するのは会長をはじめとする役員たちである。他方でタカヤマには、数人の若い衆がかりこみ、横向きに倒してあったハダケとダシダケを立てなおす作業を行う（写真3-51）。この場所には、ニシデの築港と同じようにあらかじめ予備のタケが置かれている。折れてしまったハダケやダシダケの代わりにこれらのタケ運びこみ、ハタや吹き流しを結びなおしてたてていく。

デムラの端
 ヤマは、皆月集落の南端であるデムラの端に差し掛かる（写真3-46）。このあたりは隣の餅田集落になるが、道路の都合上ヤマはこの場所まで進行し、海岸道路へのヘアピンカーブをなぞる。ちなみに、海岸道路貫通以前（一九七〇年代以前）の曳山の経路では、浜からあったヤマは、皆月と餅田の境をなす小路をのぼり、デムラの集落内

繰り返すものだった。「ヤッサー」のかけ声は、二〇〇〇年代の始め頃から用いられるようになった。当時、タカヤマで活躍していた青年会員の発案とされる。役員からはかけ声がおかしいと叱られることもあったが、実際にヤマで暴れる世代には、こちらのかけ声のノリが良いと判断されたのだろう。彼らが揃って「ヤッサー」と囃すようになり、このかけ声が定着していった。



3-48 デムラで待機する太太鼓



3-49 ヤマの運行を見守る神輿の行列

夕暮れ時、海岸道路の様子。右手前では、神様井戸への神事が行われている。一連の神事が進むと神輿にも提灯が点灯される。その間、神輿の行列の一行は、海側に並んで休憩する。奥では、ヤマがショウゴロウの下で止まり、提灯点灯の準備が始まる

4章 神様井戸と提灯点灯

神様井戸の神事

神輿みこしの行列は、ヤマの動きに合わせて待機たいきすることが多い。ヤマがデムラの端を回りきると、神輿の行列も静かに進みます。海岸道路に出て少し進んだところで、神輿は道の端に寄せられ、神主や区長、組親は、その前に腰をおろす。神輿の前にはゴザが敷かれ、御供えが据

えられる。神様井戸への神事である。これらの準備はデムラのシヨウザ（升本家）が行う（写真4-1〜3）。

すでに紹介したように伝説では、キヘイの家に住えた後、神様はシヨウザウザの家にも仕え、その後、シヨウザの井戸で身を清めてから、日吉神社に鎮座おんすましたとされる。神事が終わると神輿の一行は、神様井戸から汲んだ水で沸かしたお茶を飲んで休憩まじひした。



4-1 神様井戸への神事



4-2 神職と升本家、組親たち



4-3 神事後の直会



4-4 神輿にも提灯を点灯する



4-5 大太鼓の提灯



4-6 大太鼓の音が響き渡る

提灯点灯

シヨウゴロウ（升本家）の下までヤマが進行すると、御神酒みかみ（小休止）となる。これが宵祭りでは最後の御神酒である。

ヤマの後方、先に紹介した神様井戸への神事が落ち着く頃には、神輿みこしの周りに御神燈みかみとうが灯される（写真4-4）。神職、区長、組親たちも、手持ちの提灯ちようとうに火を灯す。大太鼓は、ヤマの後ろにつけて待機する。この時、台車に取りつけたタケの棒に提灯が飾りつけられる。ヤマの飾りを模したもので両横には岐阜提灯ぎふちようとうを括りつけ、正面には紅白提灯を並べる（写真4-1、6）。この飾りつけは、山王権現太鼓保存会が、

台車で移動するようになって、工夫されたものである。

ヤマでは、若い衆たちがタカヤマに上がり、提灯の設置を行う。まず、ハタダケとダシダケにナットウのワラ縄を渡していく。ヤマの左右の側面のダシダケとハタダケの間には、五段程度の縄を張る。タケに一卷きしつ、端から端まで縄を張って固定する（写真4-7）。左右の縄にはタケとタケの間に一つずつ、岐阜提灯を括りつけていく。提灯にはあらかじめ電池式のロウソクを差し込んで固定してある。灯りがともると、宵祭りにふさわしい姿へとヤマは変貌へんぼうしていく。

ヤマの左右の側面には、数にして約二〇〇個の岐阜提灯が飾りつけられる。上方に縄を張るときには、ダシオコシのロープがあがっての



4-15 紅白提灯を取りつける



4-14 飾られた後ろヤマの大提灯



4-8 大提灯に点灯する



4-7 岐阜提灯を飾り始めたタカヤマ



4-16 四段まで飾られた紅白提灯



4-11 前ヤマに大提灯を取りつける



4-10 ナットウをタケに括る②



4-9 ナットウをタケに括る①



4-17 役員用の弓張提灯



4-18 提灯を灯して準備した岐阜提灯と紅白提灯

作業となる（写真4-9、10）。正面と後方のダシダケの間には、約八十個の紅白提灯を飾りつける（写真4-16）。また、面幕の間には径約四五、高さ約七十センチメートルの大提灯を前に二つ、後ろに二つ飾りつける。準備編でも述べたが、かつてこれらの提灯の明かりとして和ロウソクが使われていた。現在は、労力と費用の面から電池式ロウソクに代わった。会長と役員たちも手持ちの提灯を持つ（写真4-17）。そのうちの四つは、ヤマの各車輪の側に付き、テブリの手元を照らす。それ以外の役員は進行の連絡用に使用する。ヤマの進行の場合には、提灯を上下に振り、停止の場合は左右に振って、引き手やオシミに知らせる。

皆月湾に日が沈む午後七時すぎ、四方を提灯に飾ら



4-13 ナットウと呼ばれるワラ縄。提灯を取り付けるために10数個、用意される。作り方については『準備編』の3章を参照



4-12 ダシダケの端に結んで固定する

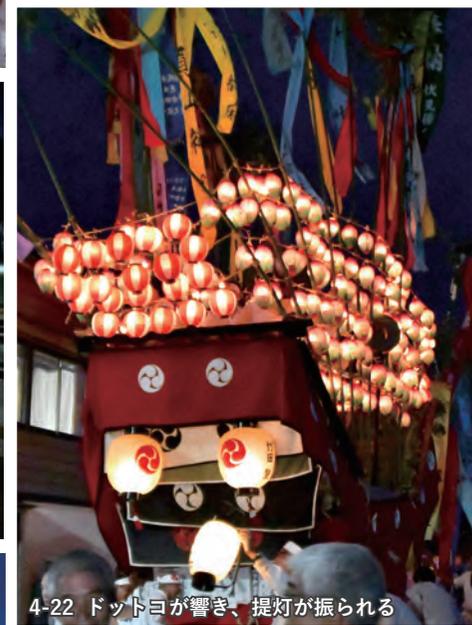
提灯飾りは、だいたい5段程度が普通であるが、多い年には6段になることもあり、括り手たちは、7段を目指しているらしい。ナットウは製作者によって大きさにばらつきがある。タケを一系列巻き通しても、そこで終わるとは限らない。作業に慣れた者は、そこから一つ上の節にナワを巻き直し、ナワが尽きるまでタケに巻いていくこともある



4-21 出発の準備をするヤマ



4-23 テプリのために提灯を照らす



4-22 ドットヨが響き、提灯が振られる



4-24 夜の曳行を撮影するメディアや撮影者



4-19 点灯された後ヤマ

れたヤマが夕闇に浮かびあがる（写真4-21）。御神酒を入れた酒樽が回収され、ドットコを待つことになる。会長は、各人の安全確保ができたことを確認し、音頭取りに呼ぼって（木遣を歌って）もらう。夜間は手にした提灯を高く掲げることによって、ドットコの合図とする（写真4-22）。

同じ頃、御飯屋前に準備された旗、ギリコ、灯籠、紙鳥居、御幣ギリコにも火が灯され、ヤマと神輿の御飯屋入りを待つことになる。

提灯行列

写真4-25では、ヤマがデムラの海岸道路を移動している。マガキの内側から（写真4-26、28）、あるいはデムラの小路からも遠い響きとともにヤマの進む姿をみることができ（写真4-29）。徐々に闇が深まり、ヤマの提灯が艶やかに浮かびあがる。引き手のかけ声も、一層盛りあがる。白装束の男たちだけでなく、綱の端には、老若男女が群がる。対して後ろヤマの若い衆たちは、ひたすらオシミを引っ張り、ヤマの進行を少しでも遅らせようとする（写真4-30）。

写真4-31では、ヤマがデムラの貯水池の側まできている。海岸道路ができる以前のデムラでのヤマの経路は、現在とは逆だった。皆月川を越えたヤマは、そのまま砂浜を南にくんだり、デムラの端までいき、そのあと村の中を通っていた。村の通りをでたヤマは、この貯水池のところで、初めてロウソクを灯したという。



4-20 前後左右の提灯が点灯される



4-26~28 マガキ戸の内側から



お年寄りの中にはあまり家から離れずに、祭りの様子を見守る方もいる。かつて呼び引きの準備で忙しかった主婦たちも同様であった。そういった方たちも想起しながら、これらのアングルからのヤマを紹介することにした

海岸道路ができるまでは、ロウソクを灯して移動する距離は、現在の半分以下だったわけである。
 海岸道路を曳行し始めてから（一九七〇年代後半〜二〇〇〇年代初め）も、この貯水池のあたりで、ヤマを一度止めて提灯ちようとうのロウソクを補充した。ヤマが揺られて提灯が燃えたり、最初に灯したロウソクが燃え尽きたりしたためである。まだ、タカヤマに作業できる子どもたち（主に中学生）がいた頃である。むしろ、子供たちの減少を鑑みかんみて青年会の役員たちが、現在の電池式のロウソクに踏み切ったという背景



4-29 デムラの小路からあおぐ



4-30 後ろから随行する観衆



4-25 海岸道路を進むヤマ

海岸道路の行列は、祭りの中で最長の長さになり、多くの人たちが参加している。しかし、ニシデヤ本町の年長の女性を中心に、御飯屋付近にたたずみ、ヤマの一行が到着する姿を待つ人たちもいる。歓声が徐々に大きくなり、提灯を灯したヤマがゆっくと近づいてくると、奉灯に照らされた御飯屋の周りも俄然、賑やかに^{がぜん}な^{にぎ}ってくる。



4-34 もうすぐ新橋



4-35 ヤマが橋にかかるまで引き手はまっすぐ進む



4-36 コウハクの前に到着したヤマ



4-32 ヤマはゆっくり御飯屋に向かう



4-31 前網で提灯をふる役員



4-33 御飯屋付近からもヤマの姿が見えてくる

もある。
 ヤマの提灯を電池式に変更したのは、二〇〇五（平成一七）年のことである。^注それまでは、前述したように火力の強い和ロウソクが用いられていた。この年からヤマの前後に灯す大提灯以外の提灯を電池式に代えることになった。電池式ロウソクのおかげで、貯水池横での休憩の必要はなくなった（写真4-32）。タカヤマの岐阜提灯、紅白提灯ともに明かりを灯し続けたまま、海岸道路を移動する。目立たないが、今もタカヤマには、二、三人の若い衆が乗り込んでいる。提灯が燃えることはなくなったが、ヤマが揺れるとロウソクが提灯を突き破るといふ新たな問題も生じるようになった。それらを軽減するために要所所でタケを揺らす係が必要になるのである。
 年配者の中にはかつてのロウソクのゆらめきにノスタルジーを覚える者もいる。しかし、電池式ロウソクの導入直前の二〇〇〇年代初めは、消えたり、燃え尽きたりしたロウソクを付け替える人出も不足していた。大勢の見物客が待つ御飯屋前に来た頃には、明かりの灯っている提灯の数が三分の一以下という寂しい姿を晒していた。そのことを考えると、明かりの灯ったヤマが御飯屋入りする姿は、やはり誇らしいものであると考える。
 （*注…準備編では二〇〇三年に変更と記したが、全面を電池式にしたのは、二〇〇五年からであることが、その後、確認されたのでここに訂正しておく。）

5章 御飯屋の賑わい



5-3 宵祭り最後のオオテブリ



5-4 態勢を整えるオオテブリ



5-2 後ろヤマの様子



5-1 新橋のたもとにきたヤマ



5-5 前ヤマをなおすオオテブリ

新橋、再び

ヤマが新橋のたもとまで到着した(写真5-1)。前綱の引き手は、海岸道路をそのまま東に進む。テブリを入れて橋の方に向きを変えるが、ヤマが曲がりきることはない。ここで最後のオオテブリが出張り、ヤマの方向修正をおこなう。役員たちの提灯で手元が灯され、二本のオオテブリが掛け声とともにヤマを回していく。この間に引き手たちは、いったん綱をゆるめ、橋を渡って待機する。

ヤマは橋を対角線上に進むため、適度な角度になおすこともある(写真5-3、4)。ただし二〇一九(令和元)年は前テブリがルーキーだったため、ヤマが曲がりきらず、新橋の山側まで進んだ。この時は、オオテブリを前ヤマに入れて、正面を向くまでヤマを直した(写真5-5)。

本来、ヤマは、新橋の海側のたもとでオオテブリで回されることが多い。かつてここからコウハクの坂と呼ばれる特設の坂道をヤマが降りたことの名残である。この坂は、毎年、祭りのために土嚢を積み重ねて作っていた。ヤマはこの坂道から浜におり、再び皆月川を越えていた。ヤマには後方だけでなく側面にもオシミが張られて、バランスをとった。後方のオシミは、

5-3,4は、後ろヤマを直している場面。若い衆の多くが集まり、オオテブリを2本とも、後ろの車輪にあてている。2019年に撮影した5-5は、前ヤマを直す場面である

コウハクの裏手にあった太いケヤキの木に回された。かつては後ろのオシミがきかずにヤマに勢いがつきすぎて、タカヤマが皆月川に突っ込んだこともあったという。宵祭り最後の、そして最大の難所であった。

ヤマの向きが整い、会長の手があがる。音頭取りのドットコも太鼓や歓声に押され気味である。ヤマは大小の提灯を煌かせ、闇夜にハタや吹き流しをなびかせながら、最後の移動を始める。待ちかねたように大太鼓や神輿の行列が、ヤマに続いて橋にさしかかる(写真5-10)。

大太鼓の音がさらに勢いをます。
新橋は囃子と歓声に包まれるが、ヤマはなかなか渡りきらない。鳥居の横の道幅が狭く、ハタや吹き流しが電線に絡まないように注意し

ながら移動するためである。テブリが慎重に調整しながらヤマを鳥居横に導く(写真5-12)。会長が他の役員と確認を取りつつ、手持ちの提灯を回して、進行の指示をだす。大太鼓を先頭に神輿の行列は、鳥居の正面に向かい、その場で待機する。

写真5-10の右下に細長い提灯が二つみえる。この提灯は「近迎え」と呼ばれる。神輿の行列が御仮屋に近づいてくるとタケにさした二本の提灯を持って迎える係のことである。デムラの海岸道路で神輿を迎え、そこからは神輿を先導する形で行列に加わっている。この近迎えの提灯は、御仮屋の両側に固定されることになる。

タカヤマが鳥居を越える(写真5-13)。役員たちの提灯に呼应して、引き手たちの腕にも力がいはい。そのまま直進し、道路の山側を進む



5-6 新橋に入るヤマ



5-7 新橋を渡り始める



5-8 皆月川の対岸から



5-9 鳥居手前のヤマ



5-10 新橋に入ったヤマ、大太鼓とそれを見守る観衆



5-11 鳥居の直前で向きを微調整する

(写真5-14)。ヤマは御仮屋小路（まじ）と呼ばれる本町の小道の正面に止められる。現在では、まるでヤマが道を遮る（さか）ようにもみえる。しかし、この場所は、ヤマが浜を移動していた時代を踏襲するものである。かつての小路はここで途切れ、浜に降りる階段があったという。海岸道路ができる以前は、本町で浜に降りることができたのは、この御仮屋小路だけであった。御仮屋にお参りにいくにも、この小路を通らねばならないので、「御仮屋小路」の名がついたとされる。

この場所で宵祭りのヤマの運行は収まる（写真5-15）。オオテブりを車輪の前後に横向きに差し入れ、車止めとする。引き綱はヤマの前方で丸く巻いてまとめられる。ヤマが収まるとシタヤマの小太鼓と鉦は午前中の伏見の下と同じく「チョウウチヨウマゴマゴ」、「ラシマル」、「ナブネ」、「ギオンバヤシ」などが披露されていた。これらのリズムを覚えていた世代が、シタヤマに乗り込み、小太鼓と鉦を打ち鳴らすこともある。

（*注：準備編で説明した御仮屋小路は、これより一筋北の小路のことであった。本来の御仮屋小路はこちらであることが、出版後、青年会OBより指摘されたのでここに訂正する。）



5-14 鳥居を越え、一気に御仮屋小路まで向かうヤマ



5-12 前ヤマの様子



5-15 所定の位置でヤマは停止する



5-13 鳥居をかすめるヤマ

御幣ギリコ

ヤマがおさまると、若衆の多くは、御飯屋の横から御幣ギリコを担ぎだす(写真5・16)。御幣ギリコは、文字通り、神主が用いる御幣をかたどった高さ三メートルほどのギリコである(『準備編』三章参照)。ギリコは木の台に据えられ、そこから前後左右二本ずつ、横棒が取りつけられている。若い衆はそれらの棒を持って、ギリコを担いでいく。ワラ縄のオシミも、ギリコに結ばれて前後から引っ張られる。神輿の行列に用いられていた小太鼓も若い衆に手渡され、先導役を

務める。「山王祭りよい、さーらばひやせ」の掛け声が響きわたる。御幣ギリコは、鳥居前に待つ神輿までゆっくりとお迎えに行く。そこから勢いよく御飯屋に向けて駆け抜ける。神輿がおさまるのはまだ、早いと言わんばかりである。この御幣ギリコのお迎えが、三度繰り返される。三度目に御飯屋まで駆け抜けるとギリコは元の場所に収まり、小太鼓だけが再び鳥居のほうに向かっていく。かつては御幣ギリコの後には、馬駆けの神事があつた。しかし、すでに述べた経緯で神馬がいなかったため、宵宮での行事も行われていない。



5-16 小太鼓の音とともに御幣ギリコが登場する



5-19 神輿から走り去る御幣ギリコと鳥居

5-16,17 は、御飯屋から鳥居に向けてゆっくり進む御幣ギリコ。5-19からは、逆に鳥居から御飯屋に向けて勢いよく駆け抜ける様子である。御幣ギリコの台には横棒と縦棒が2本ずつついており、各々に若い衆が持ちあげる。さらにギリコの「首」の部分につけられたバランスをとるワラナワのオシミをもつ係が4人おり(5-20,21)、少し距離をとりつつ、ギリコの前を引っ張っていく



5-17 神輿を迎えにいく御幣ギリコ



5-20 2度目の往復



5-21 御飯屋と鳥居の間を3往復する



5-18 鳥居から御飯屋に向けて駆け抜ける



5-27 神輿正面①



5-28 神輿正面②



5-30 神輿を差しあげる

神輿

御幣ギリコに続き、いよいよ神輿の登場となる。ここでも小太鼓の三人が先導し、若い衆が神輿を担ぎあげる(写真5-25)。鳥居から御飯屋まで、神輿はゆっくりと進む。このときも小太鼓の山王祭りよいかかけ声にあわせて、さくらばひやせと返しながら移動する。御飯屋から鳥居に向けては神輿の担ぎ棒を腰の高さまでおろし、ワッショイワッショイの掛け声とともに駆け抜ける(写真5-27、28)。鳥居の前まで来ると掛け声とともに勢いよく、神輿を差しあげる。歓声に呼応するように御飯屋の側で大太鼓も叩かれる。観衆が迫る沿道を再び神輿がいく。

このワッショイという掛け声も、ヤツサー同様、比較的最近になっ



5-26 いなせな太鼓も祭りを盛りあげる



5-29 鳥居に向かって駆け抜ける



5-22 祭りの参加者と観衆で賑わう御飯屋前



5-24 若い衆が神輿を担ぎあげる



5-23 再び小太鼓が先導する



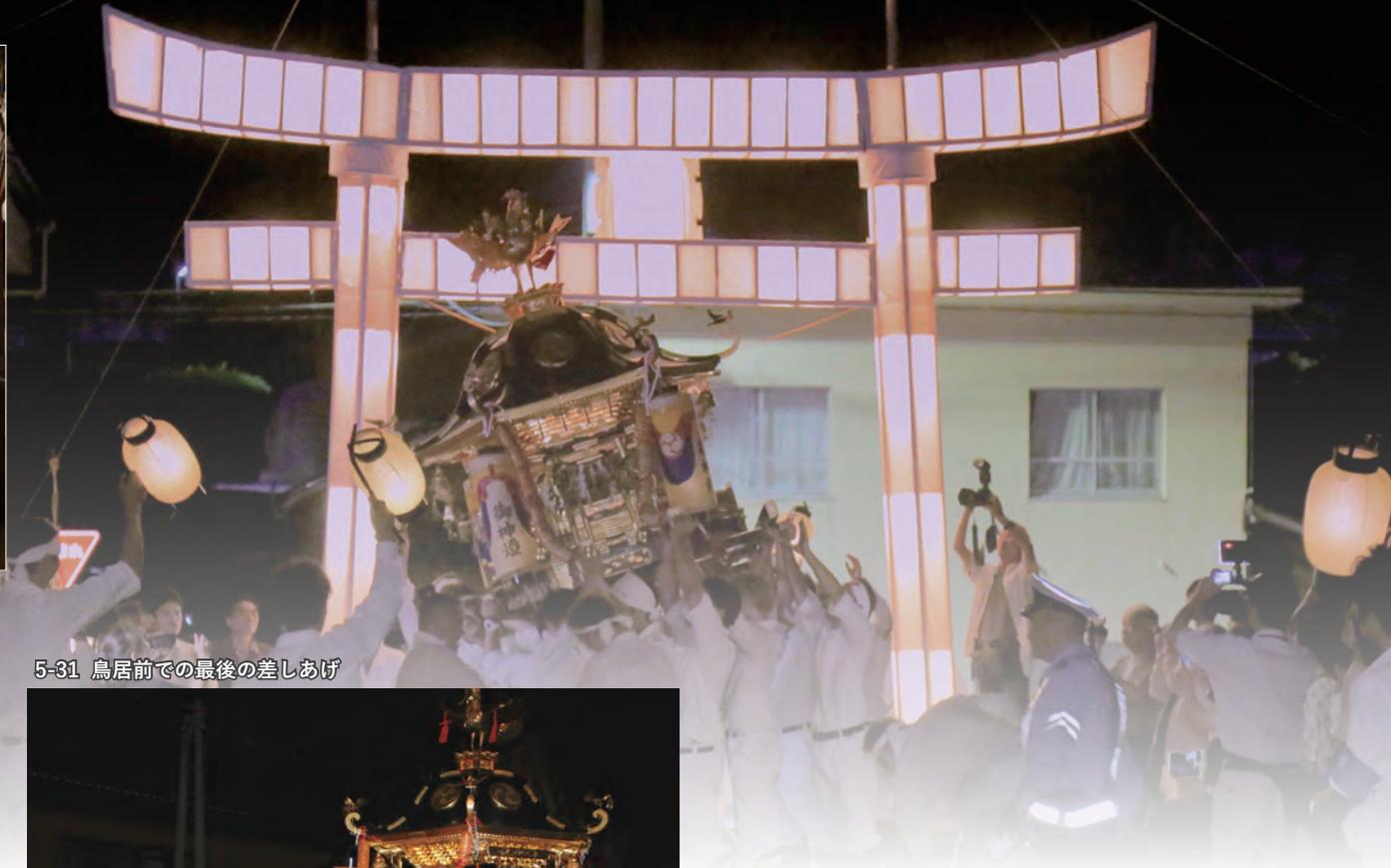
5-25 今度は、鳥居から御飯屋まで担いでいく



5-36 神輿台に慎重に据えられる



5-35 御飯屋に入る神輿



5-31 鳥居前での最後の差しあげ



5-37 神主による神事が始まる



5-38 神輿への祝詞がよまれる



5-32 最後の往復を終えた神輿



5-33 肩にあげて担いでいく



5-34 御飯屋に向かう神輿

てはじめられたものである。それまで鳥居からは「エイヤーエイヤー」とゆつくり、御飯屋からは「エイヤツエイヤツ」と早い調子で合わせていた。ほぼ二十年くらい前から現在の掛け声が変わっている。
神輿もまた鳥居と御飯屋の間を三度、往復する。最後の鳥居の前では、掛け声とともに神輿は一段と高く持ちあげられる（写真5・31）。役員たちもかけ声にあわせて提灯を高く振りあげる。その後、神輿はゆつくりと御飯屋に向けて進み始める。御飯屋の面幕に引っかかるからないように腰を落とし、慎重に運び込む。あらかじめ待機していた神主の指示で、神輿台に据えられる。若い衆はそこで退出し、代わりに区長や組親たちが御飯屋に入る。青年会や引き手、村の老若男女の多くは、御飯屋の前に腰をおろす。神事が始まり、神主の祝詞と太鼓が響きわたる。神主の所作に続いて二礼二拍手一礼し、御飯屋の周囲を手拍子がつつむ。耳の奥に祭り囃子の残響と余韻を残しながら、宵祭り

の夜は更けていく。

ヤマの下

神輿が御仮屋入りした後、青年会役員及び一部の有志は、ヤマの正面付近に集まって腰をおろす。会長をはじめ役員たちは、宵祭りの反省事項を語りあい、本祭りに向けての様々な段取りの確認を行う（写真5・40～42）。

一升瓶が開けられ、会長から順に役員たちが酒を回し飲む。ヤマの運行中、彼らは滅多なことでは御神酒を口にするのではない。たとえ樽を渡されても、口には含む程度である。ヤマが収まり、神輿が鎮座するまでは酔える気分ではないからである。

ヤマの下でのささやかな打ち上げは、和ロウソクで明かりを灯していた頃の名残りでもある。当時は、残り火の始末や安全確認も欠かせなかった。もつとも現在も、天候が心配な時は、提灯からロウソクを全て外して集会所に運ばねばならない。また、電池を二年に一度全て取り替えているため、取り替えない年には、早々とロウソクを外して、電池のもちをよくする作業も新たに発生している。



5-39 御仮屋前に集った人たち



5-41 ささやかな打ち上げをかねる



5-42 反省と段取りの確認



5-40 宵祭りを終えたヤマの様子



5-43 夜の御仮屋周辺

タカヤマとオオテブリ

タカヤマの作業

タカヤマでの行事には、観衆の目がいきやすい。ヤッサーでの若い衆の威勢のよい振る舞いや宵祭りの提灯を点灯した姿は特に印象に残るものである。しかし、ヤマの運行の大部分でタカヤマにいる者たちの作業に関心を示す観衆は少ない。

図③-1では、そんなタカヤマで行われる作業や行事をまとめてみた。主な作業はヤマを飾るハタダケとダシダケに関わるものである。宵祭りではヤマ飾りの段階でタケは立てられているが、宮の坂の途中



③-1 タカヤマでの作業の場所



③-2 オオテブリを用いる場所

で全て倒されて集落に向かう。この宮の坂を含めて宵祭りでは計四ヶ所、タケの立て倒しが行われることになる。本祭りでも朝のヤマ飾りをのぞくと計四ヶ所立て倒しが行われる。タケを立てる時は中央のゼニガタ(銭形)からたて、ハタダケ、ダシダケの順に立てていく。

ハタダケは、根元をヤマの部材に穴をあけられた穴に入れて、ダシコシンのロープ部分にヌイゴ(細いサイザル縄)で結んで固定する。ダシダケは、根元をワラ縄でハタダケと結びつけて固定する。倒す時は反対にダシダケから倒していく。ヤマ仕事のためにタカヤマには数本のカマが置かれ、大量のヌイゴとワラ縄がストックされている。それらはいずれも、一回ごとの作業に適した長さに切り揃えてある。

これ以外にもタカヤマでは多くの作業が目白押しである。特に人と時間がかかる作業は、宵祭り夕方方の提灯の点灯である(⑥)。この時は、若い衆の多くがタカヤマに上がり、ナットウを張り巡らし、提灯を結わえ、ロウソクを点灯していく。

華やかで迫力のあるヤッサーでは、その後ろでベルト持ちが二重三重となって前の者を支える。ヤッサーに先立って危険な刃物や飾りを直す工程も忘れてはならない。この他にも、タケを倒している時は、通りの幅や屋根の張り出しに合わせて、微調整しなければならぬ。電線が低い場所では、天守閣に引っかかるように又棒(またぼう)で調節することもある。宮の坂や提灯を点灯している際にも、タケを揺らして、ハタダケが絡んだり提灯が破損したりしないように常に注意している。

オオテブリ

オオテブリは、本文で述べたようにアテの木の角材を利用した大道具である。オオテブリは二本あり、通常はヤマの車輪の上のせて運ぶ。オオテブリのもっとも重要な役割は、ヤマの方向転換である。図に示したように道の角を曲がる時に用いられる。

特にニシデの角や横山前、あるいは宮の坂の下などは、必ずオオテブリを二本出して、ヤマを回していく。普通、オオテブリは車輪と車輪の接続部にかませて脚で固定し、テコの原理で動かす。主に後ろヤマに集る若い衆たちの力の見せ所である。

方向転換は、祭全体で一五回行われる可能性がある(図③-2参照)。

も、地図にポイントした場所では、多くの場合、オオテブリに集る若い衆たちの姿がある。

また、オオテブリは椅子の代わりにもなり、ヤマの車止めにも用いられる。ヤマの運行が小休止となり、御神酒が出されると、後ろヤマにはオオテブリが並べられる。若い衆は向かい合って腰掛け、御神酒を流し込む。あるいは、宮の坂や御飯屋小路の前にヤマが置かれた時には、前後の車輪の外側にオオテブリを据えて車止めにする。臨機応変に使われるオオテブリは、ヤマと一体の大道具として祭りの華やかさを盛りたててきたのである。

ただし実際には、その数に至ることはあまりない。デムラの今出川にかかるS字カーブ(⑤)や同じデムラの端のU字カーブ(⑥)は、テブリの技が試される場所であり、彼らだけで回りきろうとする。その思いを共有する青年会役員も、オオテブリの投入は最後の一手とすることが多い。この他にもニシデの海岸道路にでる角、新橋や皆月橋の角などは、引き手の力やテブリのはまり具合で、オオテブリを使わずにのりきることがある。

もっともオシミの若い衆たちは、方向転換以外にも、しばしばオオテブリを取りだす。彼らは後ろヤマの車輪にオオテブリをかませて、ヤマを背後から押しあげる。宮の坂を登るときはもちろん、先に述べたテブリがヤマを回す時にも背後から支援する。よって、方向転換に用いることがなく

6章 本祭り(1) — 本町の曳行と御仮屋お発ち

ヤマ飾り

本祭りのヤマ曳きは午後二時からだが、青年会とOBの有志たちは、午前六時からヤマの周辺に集合する。ヤマ飾りがもう一度、最初から行われる。全ての幕がおろされ、昨日の汚れが払われる。シタヤマに残されたハタや吹き流し、空き缶やペットボトルも回収される。タケも全て一端外され、幹の折れたタケは予備のタケと取り換える(写真6-1、2)。タカヤマのダシオコシも、もう一度、やり直される。ヤ

マの前後を固定するロープとそこに取り付けられたターンバックルを締めてヤマを固定する(写真6-4)。

ダシオコシが終わると、そこからの手順は宵祭りの早朝と同じである。桐幕、キリ幕と順に幕をヤマに飾っていく(写真6-5、11)。ヒヨコダシを固定し、面幕を結びなおし、アテ葉をダシのロープに結びつける(写真6-7、8、12)。さらにハタや吹き流しをつけなおしたハタダケ、ダシダケを立てていく。松や御幣箱を飾り(写真6-13、14)、最後に武者人形もこの段階で飾りつける(写真6-15)。こうして、六

6-1 ヤマ飾りの始まり

6-2 用意されたタケや幕

6-3 ネジンをカキ直す

6-4 ヤマ飾り全体図(1)

6-5 ダシオコシ

6-6 タカヤマでの作業

6-7 ヒヨコダシ

6-8 面幕の飾り

6-9 ヤマ飾り全体図(2)

6-10 ヤマ飾り全体図(3)

6-11 ヤマ飾り全体図(4)



6-18 青年会員の会費徴収



6-19 昼休みに集った青年会有志



6-20 本祭りが始まる前の新橋付近

時から始まったヤマ飾りは八時前に終了する。青年会の役員たちは、このあとほとんど休む暇はない。本祭りの午前中に青年会員の家を回り、この年の会費を徴収していく(写真6-18)。ニシデ、本町、デムラと各々の地区の者に分かれて徴収に向かう。会長たちは、御神酒の樽を確認し、必要な御神酒を各休憩ポイントに配置しておく。作業が終わると役員を中心とした有志は、昼食を兼ねて集まる(写真6-19)。

二〇一九(令和元)年の時点で、皆月青年会は、二八名になっている。人数が減少したため、集金も短時間で済むようになった。



6-15 ヤマ飾り全体図(5)



6-16 ヤマ飾り全体図(6)



6-17 デムラから見たヤマと御飯屋周辺



6-12 アデの葉を飾る



6-13 松飾りの準備



6-14 御幣箱をあげる

1990年代半ばまではヤマ飾りと並行して、町の砂浜に奉納相撲のための土俵を作っていた。この作業に関わった人を労う会が、本祭りの午前中に行われていた。現在は、テブリや首頭取り、太鼓保存会を中心とした連絡会という集いを設けている



6-26 コウハク前に寄せられるヤマ



6-25 鳥居の横にかかる



6-21 御飯屋小路前のヤマ



6-27 本祭り最初の御神酒



6-22 各々の出発準備



6-23 本祭りの引き始め



6-28 皆月川沿いを進むヤマ



6-24 新橋方面にむかう

に述べたように、かつてこの場所には、コウハクの坂と呼ばれる浜からの仮設の坂道をあがっていた。のぼり坂のため、坂をのぼりきったところで、オオテブリでヤマをなおすことが多かったようである。その頃を記憶する者たちは、テブリだけでなくオオテブリの出番を期待する。ヤマの方向転換が完了し、道路の端まで寄せられたところで、最初の小休止となる(写真6-27)。

中高生や若い衆がタカヤマに上がり、ヤマ飾りで立てたタケを倒していく。ここから電線の通る本町に入るためである(写真6-28)。

休憩が終わる頃になると、ようやく人も集まり始める。ここからヤマは正面を向いて移動をはじめ。皆月川沿いに道を進み、皆月橋から本町に入る。日吉神社の社務所を兼ねる番場家の前を通り、シバシン商店の角を向かって右に折れる。この辺りもテブリだけでカーブを

曳きはじめ

午後二時、新橋の周辺に白装束しろしょくの男たちが集まり始める。近年では、この時間に集う引き手の数がやや心もとない。それでも、テブリと音頭取りかんどが揃ったことを確認すると、役員も引き手に加わり、ドットコの声こゑが響きわたる。ヤマは、新橋をわたるまでは後ろ向きで移動し、一端、デムラの方に向けてカーブを切る(写真6-26)。このカーブは、テブリだけでも不可能ではない。しかし、多くの場合、オオテブリが出張り、ヤマを回す。本祭りの力試し、あるいは若い衆の酔い醒ましといった側面もあるが、それだけではない。すで



6-34 家の屋根に注意しながら進める



6-33 横山前の角まできたヤマ



6-29 オオテブリが押し、後輪にもテブリを入れる



6-37 シタヤマの子供たち、小太鼓を叩く



6-35 オオテブリを2本使いヤマをまわす



6-38 その横では、鉦を合わせる

シタヤマは胴幕に覆われて大変、蒸し暑い。ジュースやお茶が配られるものの、子供たちも重労働である。それでも、ヤマの中から響く小太鼓と鉦の音は祭りには欠かすことができない。彼らも各々の場所での鳴らし方を覚え、祭りの現場を体得していく



6-36 ある程度ヤマが回るとオオテブリを深くさせる



6-31 皆月橋を進む



6-30 皆月橋に入るヤマ



6-32 シバシン商店の角を曲がる

皆月橋からシバシン商店の角までカーブが続く。各々のカーブでオオテブリの直しが入ることもあれば、テブリだけで、角を回りきる年もある

超えることもあれば、オオテブリがヤマをなおすこともある。
シバシン商店の角からヤマは、ゆるやかなのぼり坂を進む(写真6-32)。約五十メートルほど進んだところで、横山家の前を左に曲がる。この角も道幅が狭く、左右の家が迫っているため、車輪にオオテブリをかませることができない。ニシデの角と同じように車輪を固定する部材の所にオオテブリを当てる。オオテブリを押しあげることによってヤマを少しずたずたしていく。ある程度、ヤマの向きが変わるとオオテブリの一本をヤマの後ろ、ないしは前の車輪にかませる(写真6-36)。もう一本のオオテブリはそのままヤマの部材を押しあげる。両者が呼吸を合わせることで相乗的な効果が生まれる。



6-47 ヤッサーしながら進むヤマ



6-44 ヤッサー 2008



6-45 ヤッサー 2011



6-46 ヤッサー 2012

上記の3枚は、いずれも年の異なるヤッサーの様子である。もっとも、この10年ほどはタカヤマの前に出張る若い衆はほとんど変化がない



6-48 宮の坂の角に着いたヤマ



6-42 ヤマを所定の位置まで進める



6-43 若い衆がタカヤマにあがる

何とかヤマを回しきると、通りを五メートルほど進み小休止となる。小休止後、引かれ始めたヤマは、宮本酒店を過ぎたところですぐに停止となる。この横山の前から宮の坂に通じる通りの道幅は狭い。とりわけ宮本酒店の前を超えたあたりからは、さらに道幅が狭まるとともにゆるやかな下り坂になる(写真6-42)。興味深いのは、あえてこの場所が、二度目のヤッサーになっている点である。危険な場所でもタカヤマに上がり、ヒヨコダシの際で暴れることが若い衆の気概でもあつ

たのだろう。なお、この時に後ろヤマのオシミを止める柱は、祭りの時期だけ設置される仕掛けになっている。

若い衆たちは一連の準備を行う一方で、前ヤマにあがって囃したてる。準備が整ったことを役員たちが確認し、音頭取りに合図を送る。ヤマが動きだすとタカヤマから一層大きな声が反響する。狭い下りのため、テブリは注意しながらヤマを進める。テブリが入り、ヤマが軋むと若い衆は、大きくよろけたり、傾いたりする(写真6-44、46)。二〇一八(平成三〇)年の写真6-47、48では、東南側の角の家が解体されたため、タカヤマに集る若い衆の全体図を俯瞰することができた。

二度目のヤッサー



6-39 休憩となり御神酒が回る



6-40 飲ませるのも役員の仕事



6-41 壮年層の引き手たちも負けられない



6-55 デムラの道をいく神輿の行列



6-57 社務所前の神輿



6-56 皆月橋の大太鼓



6-58 横山前を越えて東に進む天狗と旗持ち

6-55 から 57 までは、ヤマと同じ経路を進んでいるが、58 からは神輿独自のコースに分かれて進むことになる

一行は、新橋を渡って川沿いに東に向かい、再び、皆月橋をわたって本町にはいる。ここまではヤマの経路と同じだが、ここで神輿だけの独自のルートをとる。行列は横山の前で左に折れずにそのまま真っ直ぐに進む。沖汗酒店をこえ、ムラの東端に近い民宿皆月荘まで進む。かつてこれより先は、百成大角間に属していた。(一九九〇年代に行われた道路の敷設に伴う移転で、現在はこれより東にも皆月の世帯がある)。また、この道は、皆月川の対岸の道路が整備されるまでは、門前方面から皆月に向かう唯一の幹線(かんせん)だった。門前町の中心部から運行される路線バスも、この道を通っていた。海岸道路に接続する県道が整備されてからは、バスはそちらを通るようになり、行先も湾の向かいに位置する五十洲(いごす)まで延長された。しかし、通学に利用

御飯屋お発ち

午前中から午後にかけて、御飯屋では、個別にお参りが行われる。各々の家ごとに御飯屋のカミサマにお参りする。午後三時前、御飯屋の前に神輿の行列の一行が集まる。宵祭りと同様に係の者が、「神様のお発ちやぞ」とふれ歩いていた。区長と組親や神輿、大太鼓の代表たちが集い、御飯屋の中で神事が行われる(写真6-51)。神事が終わると神輿を台車に移動し、出発の準備が整う。前日と同じく旗持ち、大太鼓、小太鼓、神輿、神主や区長と組親たちである。旗持ちは前日とは異なる者が加わることもある。人足の係となった家で交代することもあるからである。



6-49 御飯屋へのお参り①



6-50 御飯屋へのお参り②



6-52 神輿の出発



6-51 御飯屋での神事



6-54 御飯屋を立つ天狗と旗持ち



6-53 準備する大太鼓

する子供の数も減少を続け、多くの世帯では自家用車を用いるため、利用者も限られていた。ついに二〇二〇（令和二）年の三月三十一日をもって、門前―五十洲間の路線バスは廃止された。

神輿の行列は、皆月荘を少し越えたところでUターンし、もときた道を辿っていく（写真6-62〜65）。長時間、休憩することはないが、子供たちにジュースが配られたり、ひとしきり、大太鼓が披露されることもある。その後、行列は横山前まで戻ると右に折れて、ヤマと合流する（写真6-66）。ちょうどヤマが、二度目のヤッサーを終えた頃のことが多い。神輿の行列は、宮本酒店から宮の坂への通りの途中で、ヤマが方向転換を終え、小休止に入るのを待つことになる（写真6-67〜69）。



6-66 ヤマに追いついた神輿の一行



6-62 皆月荘（竹田家）で折り返す一行



6-59 東に進む神輿



6-63 小太鼓と神輿



6-60 神職たちも神輿の後に続く



6-69 向きを直したヤマでは御神酒が回される



6-67 太鼓保存会の初代会長がバチをにぎる



6-64 沖深酒店前をいく神輿



6-61 後ろの旗持ちから見た神輿



6-68 休憩中のヤマと神輿行列の先頭



6-65 横山前から右におれる

6-66 から 69 までは、いずれも宮本酒店からの下り道とそこを曲がって宮の坂に出た付近の画像になる。ただし 6-68 だけは、撮影年が異なる。この当時は、まだ東南角に家があった。その角を隔てて宮の坂にはヤマが休憩し、手前の角では、猿田彦が待機している姿が写っている

音頭取り

音頭取りは木遣を唄うことで、ヤマを動かすタイミングを合わせるスターターの役目を持つ。ヤマの前方で会長の近くに位置を取り、その日の曳き始めや、小休止後の運行再開の場面で、会長の「呼ぼって（呼んで）くだ（唄い始めて、皆を呼んで欲しいの意）」を合図に唄い始める。



写真④-1 木遣を歌うカクベエ (池田輝夫) さん



写真④-2 扇に記された木遣の文句、(1、2ともに2008年撮影)



写真④-3 宮の坂で引き手を鼓舞する音頭取り (2008年撮影)



写真④-4 2019年の本祭りの音頭取り

な いとし殿子は下に居る」と言った歌詞もある。この他にも本文でも紹介した「ここは藻浦か通ヶ鼻か お六だおしがなつかしや」のように皆月周辺の地名や景観が読み込まれた歌詞もある。

咲いた桜になぜ駒つなく 駒が勇めば花が散る
お前一人か連れ衆はないか 連れ衆は後から籠でいく

これらの歌詞は他地域の民謡や俗謡などでも類歌を聞くことができ。一般的な歌詞も、歌われる場所や音頭取りのこだわりで、クライマックスのドットコに使われることもある。この他に独自の歌詞を作詞して唄う者もいたと言う。時に卑猥な歌詞（いわゆる猥歌）もあるが、近年の運行ではあまり聞かれない。祭の準備段階から後片付けま

出稼ぎに行った者が学んできたと言われている。同様の木遣は対岸の五十洲集落の夏祭りでも歌われていた。近世の北前船に代表される海のネットワークの記憶が、山王祭の木遣のなかにも刻み込まれていると言えらる。

写真をみればわかるように、音頭取りは一様に手に扇を持つ。引き手に対して、扇を振りながら、ヤマの運行を指示する。木遣の歌詞は七七五調（都々逸調）で節をつけて唄われる。音頭取りの唄い始めを聞き、各自は運行の準備を始める。特に綱を持つ引き手は、音頭取りが前半（七七）を歌うと「ヤットコセーヨイヤナ」とあいの手を入れる。この時、引き手は「ヤ」と「ヨ」のタイミングで二度、綱を引く動作を加える。音頭取りが後半（七五）を唄い終わると「ソーエエワ、ヨイトコ ヨイトコナー」と返す。

こうやって音頭取りは、徐々に場を盛り上げるが、ヤマの出発を告げるのが「ドットコ」である。会長がそれぞれの準備の完了を確認すると、片手を上げて音頭取りに合図を送る。この合図で音頭取りは、木遣りの最後に「ドットコ ドットコ セイコラ」と文句を付け加える。これが号令となって、引き手たちは一斉に「エイ ヤーエイヤー」と声を張りあげ、綱を引き始める。

木遣の歌詞

木遣の歌詞は、祭りや皆月の風景を詠んだものもあれば、一般にもよく知られた歌詞が用いられることもある。

今日はめでたい山王の祭り 鹿の子絞りの帯しめて
アイの朝風クダリの夕風 真風タバ風屋は風

これらは前者の事例で、最初の歌詞には文字通り山王祭という言葉

で度々開かれる酒宴で、関係者に披露されることが多い。かつての祭りでも、宵祭りの夜、引き手たちも強かに酔い、祭りが最も盛りあがった頃に歌われていた。「入れておくれよ痒くてならぬ 私一人が蚊帳の外」や「椅子になりたや風呂屋の椅子に オソソ撫でたり眺めたり」などは、猥歌のレパートリーのほんの一部である。

後継に向けて

ちなみに音頭取りたちは、木遣の歌詞を手持ちの扇に書き写していることもある（写真④・2）。扇は音頭取りの目印であると同時に、彼らのアンチヨコになることもあるわけである。

近年では人手不足のため一、二名の音頭取りに任せることが多いが、かつてはもっと多くの音頭取りが参加していた（写真④・4）。この場合、同時に同じ歌詞を唄うのではなく、一名の唄いが終わる頃を見計らい、節の終わりに自分の唄い出しを重ねることによって唄を引きつぐ。このタイミングが、実はむづかしい。ある年長者によると木遣は一人につき三題、という暗黙の縛りがあった。だから自分がドットコを歌うにしても、二題歌ってから初めてドットコの番になる。そのあたりの呼吸を分らずに、二題しか歌っていないのに、歌い出しを重ねる者や、いきなり歌ってそのままドットコをいう者もいるという。

かつての音頭取りが高齢となり、ヤマの運行全てに携われなくなつたときには、自宅周辺での御神酒（小休止）後に一節披露することもあった。しかし、ヤマの運行のためには、音頭取りに常駐してもらうに越したことはない。音頭取りもテブリと同様、後継者の育成が急務とされている。

7章 本祭り(2) — 宮の坂から宮入り

宮の坂の下

二度めのヤツサーの後、ヤマはオオテブリを用いて方向転換する。宮の坂を少し進むと小休止となる。本祭りでは計五回、小休止(御神酒)がある。その具体的な場所は、コラム②の図に記している通りである。なかでも宮の坂に入ってから、三度の小休止がある。時間を見計らって酒樽の回収が終わると、会長の手が上がり、ドットコとなる(写真7-2)。ここから次の休憩場所までは、坂道もゆるやかなため、スムーズに移動する。大変なのは御神酒係で、回収した樽を持って先回りし、樽に新しい御神酒を入れなければならない。二



7-1 音頭取りに合わせて引き手たち



7-3 後ろヤマとオシミ



7-2 ドットコの合図を送る会長

宮の坂の下、ドットコの合図を送る会長、引き手たちも音頭取りに合わせて準備する



7-4 宮の坂に差しかかるヤマ



7-5 この付近までは順調に移動する



7-6 宮の坂でのタカヤマの作業

度めの場所は、宵祭りではタケを倒したところにあたる。ここから坂の上までは、タケを立てなおして移動する。この場所にはニシデヤデムラの端と同様、予備のタケが置かれている。
かなり年長の者もタカヤマに上がり、タケを立てていく(写真7-7,8)。同じ時、後ろヤマでは残りの若い衆が、オオテブリにねまつて、御神酒を呷っている(写真7-9)。普通、考えるとほとんどの若い衆が、ヤマにあがらずに御神酒を鯨飲していそうなのである。確かに役員たちが、あがるように指示することもある。しかし、多くの場合、作業をする者と御神酒を飲んで盛りあがる者の割合は、ある程度、バランスが取れて



7-9 後ろヤマで休憩するオシミ



7-7 ハタダケを立てる



7-8 ダシダケを立てる

せっかく飾ったタケも、ヤマの境内にあがったところで再び倒される。宮の坂の茂みで折れるタケもある。それでもハタや吹き流しがはためく姿こそが、ヤマの本来の姿という矜持が、彼らをタケ飾りに向かわせる



7-10 引き手たち



7-11 御神酒の補充(これは最終の休憩時の様子)



7-20 宮の坂をあがるヤマ①



7-19 宮の坂の引き手と音頭取り①



7-22 宮の坂の引き手と音頭取り②



7-21 宮の坂をあがるヤマ②



7-24 ヤマを押しあげるオオテブリ



7-23 少しずつのぼるヤマ

最後の御神酒

タケが立てられたのを確認するとドットコとなる。ヤマは、ゆっくりと動き始める。ここから鳥居までが、本祭りでも一番の難所である。引き手が力を合わせて綱を引き、後ろヤマもオオテブリを持ち出し、押しあげる(写真7-19、24)。それでもヤマはなかなか進まない。少

かつて宮の坂の茂みでは、ハタが絡まないように、中学生がタケを揺らしていた。茂みを越えると彼らは、タカヤマにあがり、ヤッサーの前哨戦で盛りあがったものである

いる。ひとしきり御神酒を飲むとおもむろにタカヤマの作業に向かう者もいれば、人数を数えて、ヤマからおりる者もいる。



7-13 小太鼓の打ち手たち、神輿の下にて



7-12 休憩する神輿の一行



7-15 大太鼓の叩き手(1)



7-16 大太鼓の叩き手(2)



7-14 坂をあがる天狗と旗持ち



7-18 宮の坂の茂みに入るヤマ



7-17 ヤマに続く大太鼓の一行



7-31~33 境内の入口でヤマをなおす



7-26 鳥居の横に向けてテブリを入れる



7-25 オオテブリは2本とも用いる

ドットコの後、引き手たちも声を合わせるが、ヤマはビクともしない。役員たちも必死に手を振り、鼓舞する。ガタツ、少し間をおいてガタツとヤマの車輪がテブリを越える。若い衆たちも頑張りどころである。二本のオオテブリを後輪の車軸に当てる、全力で押し上げる(写真7-25)。また、後輪にもテブリの者がつき、車輪の後ろ側にテブリをかませる。ヤマの向きを変えるためではなく、後ろに戻るのを防ぐためである。一步、また、一步、引き手が坂があがっていく。鳥居の手前までくると、ヤマは少し勢いをます。鳥居をくぐることはできないため、その横から境内に入ることになる。それを見越して、テブリを前輪にいれ続けるため、ヤマの動きは鈍くならざるをえない(写真7-26)。それでも引き手の大半が境内に入り、ヤマの向きが定まってくると、最後は勢いよく、一気に鳥居の横まであげられる(写真7-30)。

ヤマが境内に入ると、向きを変えるためのオオテブリの出番になる。オオテブリは鳥居を回り込むように左向きに回していく。もっともヤマが坂のところまで十分に曲がらないと、鳥居に近すぎるため、いったん、逆の方向になおすこともある(写真7-31~33)。ある程度向きをなおすと、ヤマは鳥居と拝殿の間の参道を横切って進む。宮の横にある倉庫をかすめ(写真7-39)、拝殿に向かって左横の小路をあがっていく(写真7-40)。ここから宮の周りを時計回りに一周するわけである。この拝殿と本殿の横の路は上り坂になって

しずつ亀の歩みのように坂をあがっていく。また、路の上にはケヤキをはじめとした樹々が茂っているので、タカヤマのタケを揺らさなければならぬ。

西陽を樹々の枝が遮り、深い影をつくるあたりが、最後の休憩ポイントである。役員たちがヤマの前後に御神酒を回していく。酔酩して道に寝そべる者、御神酒を頭から浴びる者、祭りも佳境に入り、引き手もオシミも強かに酔いの回った者が多い。かつては、この休憩が終る時の御神酒の残る樽をなかなか手放さぬ者もいた。意地になつて怒鳴りだす者もいれば、懇願するように樽を抱える者もいた。もっとも近年では、樽の回収も随分と楽になった。引き手の人数が限られてきたためか、あるいは平均年齢があがってきたためか。



7-28 鳥居下まできたヤマ



7-27 鳥居の下で引き手に指示する役員



7-29 鳥居の横を通り宮の境内に入る



7-34~37 境内に入った大太鼓



7-30 坂の下からヤマを見あげる

しずつ亀の歩みのように坂をあがっていく。また、路の上にはケヤキをはじめとした樹々が茂っているので、タカヤマのタケを揺らさなければならぬ。



7-44 宮の裏手に広がる畑に並ぶヤマの引き手、畑の青い囲いは猪など獣害を防ぐためのネット



7-46 出発のドットコを待つ引き手



7-45 オオテブリでヤマをなおす



7-48 最後のオオテブリ



7-47 宮の裏道を移動するヤマ



7-41 引き手たちをタカヤマから俯瞰する



7-38 参道を横切るヤマ



7-42 宮の裏側に向かう上り道



7-39 倉庫の横の小道に向かうヤマ



7-43 宮の裏手に出てきたヤマ



7-40 拝殿の横を移動する



7-55 最後のヤッサーにそなえる

られている。会長たちは、オシミの固定と全体の安全を確かめると、ドットコの合図を送る。引き手たちがなだらかな坂をくだり始める。テブリが外れ、ヤマは上下に揺れながら坂を進む。乗っていた若い衆は、動き出したショックでつんのめり、ベルト持ちに後ろに引き戻される。体勢を崩しながらも、もう一度ヒョコダンに立とうとする者、この機に乗じて前に出張ろうとする者、倒したタケに押し出される者もいる。何年かに一度は、勢い余ってヤマから落ちる者もでる。ヤマは境内の平坦な所までくると止められる。こち



7-59 ヤッサー 2011



7-56 タカヤマに若い世代が並ぶ



7-60 ヤッサー 2010



7-57 動きはじめたヤマ



7-61 ヤッサー 2019



7-58 勢いで後ろに押し戻される



7-52 滑り止めの柱



7-51 オシミを結わえる



7-49 タカヤマからオシミを送る



7-50 車軸をつなぐ部材に結びつける

ヤマが最後のオオテブリで盛りあがっている頃、年長者たちの一部と役員は、ヤマのオシミを長いロープに掛け替える。タカヤマから通したオシミをヤマの前後の車軸を固定する太い部材にかけて結びつける（写真7-49〜52）。役員はヤマがなおった頃を見はからい、所定の位置まで進ませる。あらかじめオオテブリを持ち出し、停止線に用いる（写真7-53）。ヤマが止まると待ちかねたように若い衆がタカヤマにあがっていく。我先に前ヤマに向かい、「ヤッサー、ヤッサー」と囃したてる。オオテブリは外され、代わりにテブリが車輪に据え

夷坂のヤッサー

このような時には、いったんヤマを止め、体勢を立てなおす。引き手たちもそのまま綱を引っ張り、宮の裏の畑に入りこんで長い列を作る（写真7-44）。足場を確認しつつ、綱を引く手に力を入れる。ヤマがあがりきり、向きを変えると、ここからはゆるやかな下り坂である（写真7-47）。本殿の背後をヤマは進み、併設されている夷社の裏を超えたところで、再び、右に向かって方向転換を行い宮の横にでてくることになる（写真7-48）。この境内の草地のくんだり坂は夷坂と呼ばれる。祭り最後のヤッサーの舞台である。



7-54 タカヤマにあがる若衆



7-53 坂の手前までヤマを寄せる



7-70 ワラを通して馬を引っ張る



7-69 こちらは、旧の「神馬」



7-72 駆け抜ける神馬



7-71 何故か、6本足の神馬

神輿の宮入り
ヤッサーや馬駆けが行われている間、神輿の行列も宮の周りを巡る。ヤッサーと馬駆けの最中は待機するが、行事が終わると再び移動をはじめ、都合、三周まわることになる。

周り終えた神輿を若衆が担ぎ上げる。小太鼓も若い衆が受け持ち神輿を先導する。参道の両側に引き手たち、他、全ての観衆が集まる。「山王祭りよい」「さー

らにもあらかじめオオテブリが置かれて目印とされる。そこまで来ても若い衆は、飛び跳ね、叫び続ける。タカヤマに人が多いときには、後ろヤマでもヤッサーする者もいる。年によっては、役員の判断でオシミを引き直し、もう一度ヤマを坂の途中まであげることもある(写真7-67)。
ヤマがようやく落ち着くと、「馬駆け」が行われる。といっても、本物の馬が出るわけではない。市販の馬の被り物を使った擬似的な馬駆けである(写真7-69〜72)。約一〇年前に若い衆が試したところ、意外に好評であった。この馬駆けは二、三年続けられたが、被り物が破損して使えなくなった。その後、この試みはしばらく行われなかったが、二〇一九年に二代目の被り物が登場し、馬駆けが再開された。初代の馬の頭が白馬だったため、今回も白い馬になっている。この盛りあがりの背後にも、本当の神馬が登場する祭りへの期待が大きいことがうかがわれる。



7-65 年長者がオシミを引く



7-62 多くの腕が暴れる者ベルトを掴んでいる



7-66 ヤマを引きなおすオシミ



7-63 最後のヤッサー



7-67 坂をくだるヤマを見送る神輿



7-64 ヤマが止まっても騒ぎ続ける若い衆



7-74 エビス坂を下りる神輿の一行



7-73 宮の周りを巡る、天狗さんは少し休憩



7-68 所定の場所におさまる



7-81 拝殿に向かう小太鼓と神輿



7-76 神輿が駆け抜ける (2011)



7-75 囃しながら神輿を迎える



7-83 若い衆たちもそれぞれ腰を下ろす



7-82 拝殿の前に据えられる



7-78 鳥居直前の神輿 (2017)



7-77 神輿を先導する小太鼓



7-79 三度目のワッショイ (2019)

らびやせ、かけ声が響く。神輿は御仮屋と同じく三往復する。鳥居から拝殿に向かつてはゆっくりと進み、拝殿から鳥居に向けては、神輿を低く持つて勇ましく駆け抜ける。鳥居の手前で高く差された神輿は、再び拝殿に向かつて担がれていく。三度の往復を終えると神輿は、拝殿の前に据えられ、神主が御神体を社社の本殿にお遷しする。ヤマの引き手、太鼓、祭りを見物する全ての観衆が、宮の周りに集まり、宮を向いて腰をおろす。

その後、拝殿内で神事が執り行われる。静まり返った境内に太鼓の音が鳴り、やがて、神主の拍手の音が聞こえる。各々がその拍手に合わせて、二礼二拍手一礼する。二日間にわたった皆月山王祭りはここに幕を閉じる。



7-84 皆が拝殿に向かって腰をおろす



7-80 宮の鳥居前で差しあげられる神輿



祝 天皇陛下御即位

納

奉

皆月
山王



7-93 キリコの片付けに向かう青年会員



7-92 宮の坂をおりていく村の人たち



7-87 拝殿内に運ばれる神輿



7-86 神輿の鳳凰をとりはずす

後片付け

多くの人たちは、家族や友人、近所の者と連れ立って帰途につく。しかし、青年会員（の多く）は、そういう訳にはいかない。まず神事の後、神輿を拝殿の中に運びこむ。鳳凰の飾りを外し、神輿を担いで宮に入る。そこから彼らは、二つのグループに分かれる。境内に残って曳山の後片付けをする者たちと、御飯屋まで下りて、御幣ギリコ、旗ギリコ、鳥居の撤収を担当する者たちである。

境内ではタケを倒し、結んでいたハタと吹き流しを取り外してたたんでいく（写真7-91）。松やアテ葉からはサルコを外す。宮の倉庫から、各々を保管する大きな木箱を取り出し、直接入れることも多い。ゼニガタのハタのように高価なハタは、入れる木箱も別になっている。

次にヒヨコダシを外し、面幕、キリ幕、胴幕と全ての幕を外していく。これらの幕は、芝やワラの切れ端がある程度はたき落としてからたたんで、木箱に入れる。全ての飾りを外した状態になるまで一時間近くかかる。

御飯屋の周辺では、旗ギリコ、鳥居の順番で作業を行う。御幣ギリコはそのまま軽トラックに乗せて宮へ運ぶ（写真7-94、95）。人数が多くて元気があれば担いで行く年もあった。旗ギリコは支柱から外して宮まで運ぶ。鳥居はオシミを外して倒した後、固定してい



7-95 御幣ギリコを軽トラックにのせる



7-94 鳥居の解体に取りかかる

た番線を切ってパーツごとに分けて運んでいく。宮に運ばれたキリコや鳥居は、電球を外してから倉庫の横にまとめておく。これらは翌日、人足が掃除することになっている。

翌二三日、午前八時に青年会の有志が宮に集まる。ネジンをかけた状態のヤマを解体し、片付けるためである。後片付けは、かつては人足の分担であった。基本的に青年会は関与せず、役員たちが、青年会としての後始末を行っていた。各場所に残した御神酒の回収や折れたタケの処理、ヤマの運行表の回収、ヤマの運行への労をねぎらうための御礼参り、などである。現在もこれらの作業は、ヤマの解体後に役員たちがこなしている。

青年会がヤマの解体と片付けに加わるようになったのは、二〇一四（平成二六）年からであった。この年、台風のためにヤマと神輿の渡御が中止になった。青年会の役員と区長や組親との話し合いの末、集会所前でのヤマの飾りつけだけが許可された。結果的にヤマは、海岸道路沿いにニシデまで引かれ、提灯も点灯された。ヤマの運行にこだわる青年会員の思いが部分的に遂行されたことになる。一連の流れの中で、自分たちが出したヤマに責任を持つために、ヤマの片付けにも参加したことが契機となった。

青年会にとって、この作業が負担でないといえは嘘になる。会員の大半は、普段は皆月にはいない。祭りのために休みを作り帰ってくるわけだが、一二日には



7-89 境内を後にする人たち



7-88 ヤマのタケを外していく



7-91 タケの旗や吹き流しを片付ける



7-90 旗を収納する木箱



7-103 車輪の前後をはずす



7-102 倉庫の手前まで車輪部を運ぶ



7-106 キリコの片付け



7-105 車軸の片付け



7-104 ヤマの車輪を抜く



7-97 ダシダケを外す



7-96 ヤマの解体作業の始まり



7-99 外したタケをおろす



7-98 ネジンカキのワラ縄を切る



7-101 ヤマの主要部を部材ごとに分ける



7-100 ヤマの上部を解体していく

夕方、集会所に青年会員たちが、三々五々集まってくる。祭りの準備段階から携わってきた者たちのアトフキ(後祭り)である。

家族とともに皆月を離れる者も多い。なかには祭りが終わったその日に戻る者もある。祭りの最中からできるだけ声をかけ、協力者を募り、OBの有志の協力を得ながら、作業に従事している。

ヤマの解体は、人数が揃えばそれほど困難ではない。ただ前後の車軸を固定する木製の留め具を外す作業や車軸から車輪を抜く作業は力よりも一定のコツが必要になる。解体したヤマの部材は、宮の倉庫になおす。四つの車輪だけは、倉庫の奥にある神輿の台車置きの中に仕舞うが、それ以外は一カ所にまとめて収納する。御飯屋の部材と混同しないためである(準備編参照)。

この日は並行して御飯屋の解体と部材の回収も行われる。こちらの作業は、従来通り人足の仕事である。午前八時から人足の男性たちがユニックなどの重機も用いて、御飯屋を解体し、部材をトラックに乗せて宮まで運んでくる。昨日、宮の倉庫前に運び込んだキリコや鳥居の木組は、人足の女性たちが紙を外し、ノリを水洗いして干しておく。また、神輿や小太鼓の衣装を干す作業も手分けして行う。その他に宮の化粧幕や旗類の回収と収納も人足の仕事となる。各々の作業は、ほぼ午前中には終了する。

アトフキ

前日の片付けでは幕を外しただけで、ヤマはネジンカキされて固定された状態のままである。まず、タカヤマのダシダケを外し(7-97,99)、柱に固定しているネジン棒と縄を切り外してから(7-98)、ヤマの部材を外していく(7-100,101)上部の部材を外しおえると、車輪部分を倉庫の側まで運んでから解体する



7-111 デムラ、ショウゴロウ前にて1



7-110 ニシデでのアトフキの太鼓



7-113 ウマも太鼓を叩く



7-112 デムラ、ショウゴロウ前にて2



7-109 アトフキ 2019



7-107 アトフキ 2011-1



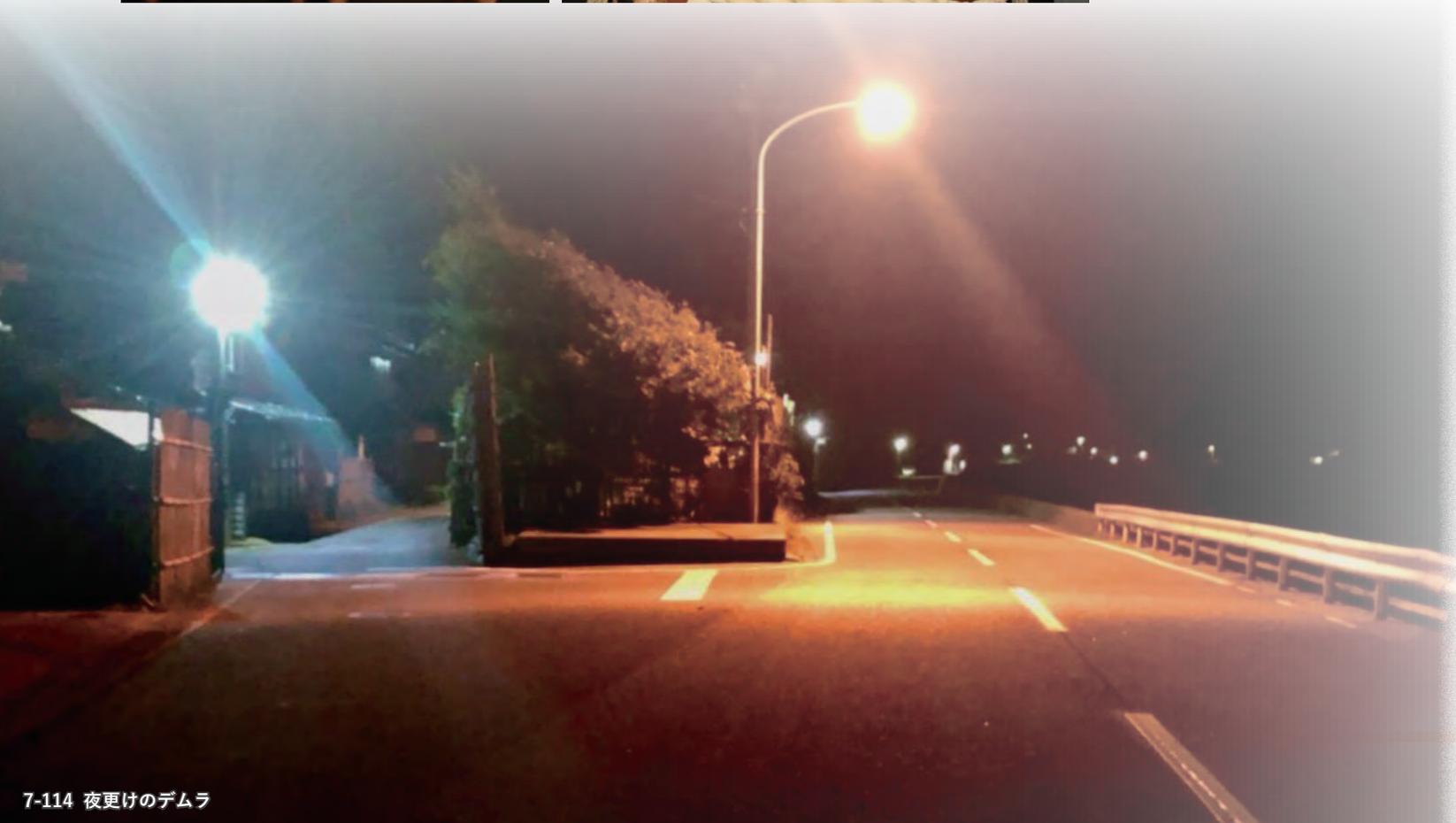
7-108 アトフキ 2011-2

毎年、六時過ぎからアトフキは始まる。祭りの期間中、裏方に徹した役員たちの労をねぎらうことが主な目的であり、オードブルや寿司を調達して盛りあがっていた。近年ではお酒の飲めない高校生や太鼓の会で活躍してくれる女性にも声をかけるように配慮している。焼肉は定番だが、近年は地元のサザエとアワビで作ったアヒージョが好評だった。もつとも、中心メンバーも三十代半ばを超え、あっさりした漬物に箸がいくことが多い。

会が落ち着く頃を見計らい、大太鼓と小太鼓が持ち出される。好きな者が集まり、ヤマの経路を太鼓を叩きながら一周するのである。祭りの余韻を楽しむ人たちが、少し遅れて盆の休みで戻ってきた人たちが、通りに出て、太鼓の音に耳を傾ける。一升瓶を進呈してくれる家もある。飛び入りでバチを握るかつての青年会員もいる。

太鼓の一行は、ニシデから海岸道路を抜け、デムラにはいる。そこから、本町に戻り、神輿と同じく皆月荘まで周り、最後に宮まであがることが多い。何軒かの役員の家の前では、太鼓を止めて熟練した者たちの打ち合いとなる。その音は、過ぎていった祭りへのそこはかない寂しさを紛らわせ、来年の祭りへのゆるやかな、しかし、確かなつながりを約束するものであった。

夜は更け、祭りは終わった。皆月には少し早い秋の風が吹いていた。



7-114 夜更けのデムラ

掲載写真一覧（年月日、撮影者、ページ）

0-0	2019、川村清志	2	1-60	2019、川村清志	27	2-28	2018、川村清志	46	3-51	2012、岩谷浩史	65
0-1	青年会員数推移図	6	1-61	2019、川村清志	27	2-29	2019、川村清志	46	3-52	2012、岩谷浩史	65
0-2	2020、小谷奉之	7	1-62	2019、川村清志	28	2-30	2019、川村清志	47	3-53	2019、川村清志	64,65
0-3	2018、川村清志	11	1-63	2011、川村清志	28	2-31	2011、川村清志	47			
	1章		1-64	2011、川村清志	28	2-32	2011、川村清志	47		4章	
1-1	2019、川村清志	12,13	1-65	2018、川村清志	28	2-33	2011、川村清志	47	4-1	2019、川村清志	66
1-2	2019、川村清志	12	1-66	2011、川村清志	29	コラム②			4-2	2018、川村清志	66
1-3	2019、川村清志	13	1-67	2017、川村清志	29	②-1	2019、川村清志	48	4-3	2019、川村清志	66
1-4	2019、川村清志	12	1-68	2018、川村清志	30	②-2	地図	48	4-4	2018、川村清志	67
1-5	2019、川村清志	13	1-69	2018、川村清志	30	②-3	2011、川村清志	49	4-5	2019、川村清志	67
1-6	2019、川村清志	14	1-70	2019、川村清志	31	②-4	2017、川村清志	49	4-6	2019、川村清志	67
1-7	2018、川村清志	14	1-71	2017、川村清志	31	②-5	2017、川村清志	49	4-7	2018、川村清志	68
1-8	2018、川村清志	14	1-72	2017、川村清志	31	②-6	2018、川村清志	49	4-8	2018、川村清志	68
1-9	2018、川村清志	14	1-73	2017、川村清志	31				4-9	2018、川村清志	68
1-10	2018、川村清志	14	1-74	2019、川村清志	31	3章			4-10	2018、川村清志	68
1-11	2008、岩谷浩史	15	1-75	2019、川村清志	32	3-1	2018、川村清志	50	4-11	2008、岩谷浩史	68
1-12	2008、岩谷浩史	15	1-76	2017、川村清志	32	3-2	2010、岩谷浩史	50	4-12	2018、川村清志	68
1-13	2008、岩谷浩史	16	1-77	2017、川村清志	32	3-3	2008、岩谷浩史	51	4-13	2015、川村清志	68
1-14	2011、川村清志	16	1-78	2019、川村清志	32	3-4	2010、金澤 栗	51	4-14	2017、川村清志	69
1-15	2011、川村清志	16	1-79	2019、川村清志	33	3-5	2008、岩谷浩史	51	4-15	2008、岩谷浩史	69
1-16	2019、川村清志	17	1-80	2012、川村清志	33	3-6	2019、川村清志	52,53	4-16	2018、川村清志	69
1-17	2019、川村清志	17	1-81	2018、川村清志	33	3-7	2019、川村清志	53	4-17	2019、川村清志	69
1-18	2019、川村清志	17	1-82	2018、川村清志	34	3-8	2011、川村清志	52	4-18	2019、伏見温子	69
1-19	2009、川村清志	17	1-83	2011、川村清志	34	3-9	2019、川村清志	52,53	4-19	2018、川村清志	70
1-20	2019、川村清志	18	1-84	2019、川村清志	34	3-10	2011、川村清志	53	4-20	2018、川村清志	70
1-21	2019、川村清志	18	1-85	2010、川村清志	34	3-11	2019、川村清志	54	4-21	2018、川村清志	71
1-22	2019、川村清志	19	1-86	2012、川村清志	34	3-12	2011、金澤 栗	54	4-22	2018、川村清志	71
1-23	2011、金澤 栗	19	1-87	2012、川村清志	35	3-13	2011、金澤 栗	54	4-23	2019、川村清志	71
1-24	2011、川村清志	19	1-88	2017、川村清志	35	3-14	2010、金澤 栗	54	4-24	2018、川村清志	71
1-25	2017、川村清志	19	1-89	2018、川村清志	35	3-15	2012、川村清志	55	4-25	2019、川村清志	72
1-26	2018、川村清志	20	1-90	2017、川村清志	35	3-16	2011、金澤 栗	55	4-26	2018、川村清志	73
1-27	2018、川村清志	20	1-91	2019、川村清志	35	3-17	2008、岩谷浩史	56	4-27	2018、川村清志	73
1-28	2018、川村清志	20	1-92	2008、川村清志	35	3-18	2011、川村清志	56	4-28	2018、川村清志	73
1-29	2018、川村清志	20	コラム①			3-19	2011、川村清志	56	4-29	2019、川村清志	73
1-30	2019、川村清志	21	①-1	2019、川村清志	37	3-20	2008、岩谷浩史	56	4-30	2018、川村清志	73
1-31	2011、川村清志	21				3-21	2018、川村清志	57	4-31	2018、川村清志	74
1-32	2019、川村清志	21	2章			3-22	2011、川村清志	57	4-32	2018、川村清志	74
1-33	2011、川村清志	21	2-1	2018、川村清志	38	3-23	2017、川村清志	57	4-33	2019、川村清志	74
1-34	2019、川村清志	22	2-2	2019、川村清志	38	3-24	2019、川村清志	57	4-34	2018、川村清志	75
1-35	2019、川村清志	22	2-3	2019、川村清志	38	3-25	2019、川村清志	58	4-35	2018、川村清志	75
1-36	2018、川村清志	22	2-4	2019、川村清志	39	3-26	2019、川村清志	58	4-36	2018、川村清志	75
1-37	2019、川村清志	22	2-5	2019、川村清志	39	3-27	2012、岩谷浩史	58			
1-38	2010、岩谷浩史	22	2-6	2011、川村清志	39	3-28	2018、川村清志	58		5章	
1-39	2018、川村清志	23	2-7	2018、川村清志	40	3-29	2010、岩谷浩史	59	5-1	2019、川村清志	76
1-40	2019、川村清志	23	2-8	2019、川村清志	40,41	3-30	2017、川村清志	59	5-2	2017、川村清志	77
1-41	2019、川村清志	23	2-9	2019、川村清志	41	3-31	2019、川村清志	59	5-3	2017、川村清志	77
1-42	2020、升本一理	23	2-10	2019、川村清志	43	3-32	2019、川村清志	60	5-4	2010、岩谷浩史	77
1-43	2011、岩谷浩史	24	2-11	2018、川村清志	43	3-33	2012、川村清志	60	5-5	2019、川村清志	77
1-44	2011、岩谷浩史	24	2-12a	2018、川村清志	43	3-34	2018、川村清志	60	5-6	2017、川村清志	78
1-45	2011、岩谷浩史	24	2-12b	2020、貫山 敬	43	3-35	2019、川村清志	60	5-7	2017、川村清志	79
1-46	2013、岩谷浩史	24	2-13	2011、川村清志	44	3-36	2017、川村清志	60	5-8	2018、川村清志	78
1-47	2020、小谷紘樹	24	2-14	2018、川村清志	44	3-37	2018、川村清志	61	5-9	2017、川村清志	79
1-48	2011、岩谷浩史	25	2-15	2018、川村清志	44	3-38	2018、川村清志	61	5-10	2019、伏見温子	80,81
1-49	2018、川村清志	25	2-16	2017、川村清志	44	3-39	2012、川村清志	61	5-11	2018、川村清志	81
1-50	2018、川村清志	25	2-17	2019、川村清志	44	3-40	2011、金澤 栗	61	5-12	2019、川村清志	82
1-51	2010、金澤 栗	25	2-18	2019、川村清志	44	3-41	2018、川村清志	62	5-13	2017、川村清志	82
1-52	2019、川村清志	26	2-19	2018、川村清志	45	3-42	2017、川村清志	62	5-14	2019、川村清志	83
1-53	2019、川村清志	26	2-20	2011、川村清志	45	3-43	2010、川村清志	62	5-15	2019、川村清志	83
1-54	2010、川村清志	26	2-21	2011、川村清志	45	3-44	2018、川村清志	62	5-16	2018、川村清志	84
1-55	2018、川村清志	26	2-22	2011、川村清志	45	3-45	2018、川村清志	62	5-17	2019、川村清志	84
1-56	2011、川村清志	26	2-23	2019、川村清志	45	3-46	2008、岩谷浩史	63	5-18	2011、金澤 栗	84
1-57	2010、金澤 栗	26	2-24	2017、川村清志	45	3-47	2018、川村清志	63	5-19	2018、川村清志	85
1-58	2019、川村清志	27	2-25	2013、川村清志	46	3-48	2019、川村清志	64	5-20	2012、川村清志	85
1-59	2019、川村清志	27	2-26	2011、川村清志	47	3-49	2019、川村清志	64	5-21	2018、川村清志	85
			2-27	2011、川村清志	47	3-50	2012、岩谷浩史	65	5-22	2019、川村清志	86

掲載写真一覧（年月日、撮影者、ページ）

5-23	2017、川村清志	86	6-40	2019、川村清志	102	7-29	2019、川村清志	114	7-93	2019、川村清志	127
5-24	2019、川村清志	86	6-41	2017、川村清志	102	7-30	2019、伏見温子	114	7-94	2008、岩谷浩史	127
5-25	2019、川村清志	86	6-42	2012、岩谷浩史	102	7-31	2008、岩谷浩史	115	7-95	2018、岩谷浩史	127
5-26	2019、川村清志	87	6-43	2012、六郎木佳帆	102	7-32	2019、川村清志	115	7-96	2011、川村清志	128
5-27	2018、川村清志	87	6-44	2008、岩谷浩史	103	7-33	2019、川村清志	115	7-97	2018、小谷奉之	128
5-28	2019、川村清志	87	6-45	2011、金澤 栗	103	7-34	2019、川村清志	115	7-98	2018、川村清志	128
5-29	2019、川村清志	87	6-46	2012、岩谷浩史	103	7-35	2019、川村清志	115	7-99	2018、川村清志	128
5-30	2018、川村清志	87	6-47	2018、川村清志	103	7-36	2019、川村清志	115	7-100	2018、小谷奉之	128
5-31	2019、川村清志	88	6-48	2018、川村清志	103	7-37	2019、川村清志	115	7-101	2018、川村清志	128
5-32	2008、岩谷浩史	88	6-49	2018、川村清志	104	7-38	2018、川村清志	116	7-102	2018、川村清志	129
5-33	2019、川村清志	88	6-50	2019、川村清志	104	7-39	2019、川村清志	116	7-103	2018、川村清志	129
5-34	2017、川村清志	88	6-51	2019、川村清志	104	7-40	2019、川村清志	116	7-104	2018、川村清志	129
5-35	2019、川村清志	89	6-52	2019、川村清志	104	7-41	2018、川村清志	116	7-105	2018、小谷奉之	129
5-36	2011、金澤 栗	89	6-53	2019、川村清志	104	7-42	2010、岩谷浩史	116	7-106	2018、小谷奉之	129
5-37	2019、川村清志	89	6-54	2019、川村清志	104	7-43	2019、川村清志	116	7-107	2011、川村清志	130
5-38	2019、川村清志	89	6-55	2019、川村清志	105	7-44	2018、川村清志	117	7-108	2011、金澤 栗	130
5-39	2017、金澤 栗	90	6-56	2019、川村清志	105	7-45	2019、川村清志	117	7-109	2017、川村清志	130
5-40	2017、川村清志	91	6-57	2019、川村清志	105	7-46	2019、川村清志	117	7-110	2017、川村清志	131
5-41	2017、川村清志	91	6-58	2019、川村清志	105	7-47	2019、川村清志	117	7-111	2017、川村清志	131
5-42	2017、川村清志	91	6-59	2019、川村清志	106	7-48	2019、川村清志	117	7-112	2012、岩谷浩史	131
5-43	2017、川村清志	90,91	6-60	2019、川村清志	106	7-49	2018、川村清志	118	7-113	2012、岩谷浩史	131
			コラム③			7-50	2018、川村清志	118	7-114	2020、升本一理	131
			③-1 地図		92	6-61	2019、川村清志	106			
			③-2 地図		93	6-62	2019、川村清志	106			
						6-63	2019、川村清志	106			
						6-64	2019、川村清志	106			
			6章			6-65	2011、川村清志	106			
6-1	2010、岩谷浩史	94	6-66	2018、川村清志	107	7-55	2008、岩谷浩史	119			
6-2	2012、岩谷浩史	94	6-67	2018、川村清志	107	7-56	2011、金澤 栗	119			
6-3	2018、川村清志	94	6-68	2011、川村清志	107	7-57	2010、岩谷浩史	119			
6-4	2008、岩谷浩史	94	6-69	2011、川村清志	107	7-58	2010、岩谷浩史	119			
6-5	2018、川村清志	95	コラム④			7-59	2011、岩谷浩史	119			
6-6	2018、川村清志	95	④-1	2012、川村清志	108	7-60	2010、金澤 栗	119			
6-7	2010、金澤 栗	95	④-2	2008、岩谷浩史	108	7-61	2019、伏見温子	119			
6-8	2018、川村清志	95	④-3	2008、岩谷浩史	109	7-62	2008、岩谷浩史	120			
6-9	2008、岩谷浩史	95	④-4	2019、川村清志	109	7-63	2010、岩谷浩史	120			
6-10	2008、岩谷浩史	95				7-64	2012、川村清志	120			
6-11	2008、岩谷浩史	95		</							

本書の執筆と編集は、以下のように行った。

本書の「はじめに」は川村が執筆を担当した。「祭りの概要と近年の変化」については、川村が、倉本の文章を参照しつつ、全体の論旨を作成した。そのため、各々の立場性が錯綜している部分が見られる。例えば、女性の太鼓への参加についての記述は川村が整理し、祭りの連絡会については、倉本がまとめている。その後のテブリや音頭取りへのお礼の形式についての提言も、長く青年会会長を務めた倉本の立場が反映されている。これら異なる視点からの考察が含まれるものの、全体として意見を異にするものではないので、互いの視点を尊重しうる記述を心がけた。

本文のうち、宵祭りに関わる一章から五章については、倉本の記述を基底として、章立て上の配置や文章の構成を川村が行った。六章と七章については、川村が基本的な文章を作成した。

〈コラム①〉のテブリについては、倉本が執筆を担当した。自らがテブリを担当した経験に基づき、祭りの現場での技能の習得と課題をまとめている。〈コラム②〉の御神酒係は、川村の御神酒係の経験と参与観察に基づいて執筆した。〈コラム③〉のタカヤマとオオテブリは、川村による参与観察に基づいて整理し、運行図へのマッピングも行った。〈コラム④〉の音頭取りは、倉本の記述と川村の聞き取り調査を重ね合わせながら作成した。

初校については、沖泮雄二郎、河嶋拓也、升本一理、小谷紘樹、小谷奉之の校閲を仰いだ。いずれも青年会会長や役人を歴任した人たちである。そこでの指摘に従い一章の構成について大幅な変更を加え

た。当初、ヤマを取り巻く配置の説明とヤマの曳きはじめの叙述が錯綜していると指摘があったので、その部分を二つの小見出しに分けることにした。また、倉本からの章ごとの詳細な指摘を受けて、随時、テキストや画像の修正と補完を行った。その他の監修の指摘についても初校の段階で、適宜、修正している。ただし、倉本から指摘があった術語や写真のカットについては、一部、修正できなかったページもある。編集上、難しいと判断したものもあるが、画像については、地元への還元という視点から、祭りに参加された多くの方を紹介したいという立場を優先した。

また、初校の段階で、一章に御手洗川の神様岩についてのミニコラムを作成した(二四ページ)。これは、比較的近近の変化であるが、景観の変化や世代交代によって急速に忘れられようとしていたため、祭礼行事と合わせて紹介する意図があった。また、山王祭りと直接関係しないため、ここでは割愛したが、これらの補足調査の過程で、かつて鎮火祭で祀られていた、デムラの神明社にある神様岩を再確認することもできた。

なお本書では、地元での一般的な意識を考慮して、曳山の担当者は敬称略とし、神輿の行列については敬称を伏している。

編著

川村清志 国立歴史民俗博物館・准教授
倉本啓之 皆月青年会元会長

監修

沖泮雄二郎 皆月青年会元会長
河嶋拓也 皆月青年会元役員
小谷奉之 皆月青年会元会長
高科真紀 国立歴史民俗博物館・特任助教
升本一理 皆月青年会前会長
小谷紘樹 皆月青年会会長

編集協力

皆月日吉神社
皆月青年会
皆月山王権現太鼓保存会
伏見孝一 皆月区長
番場誠 皆月日吉神社宮司
有賀辰也 皆月青年会元会長
寺二奉代 皆月青年会元会長

写真撮影、提供

川村清志 姫路獨協大学
岩谷洋史
金澤 栞 札幌大学文化学部生(当時)
川島大和 皆月青年会元会長

小谷 紘樹

小谷 奉之

管友梨恵

伏見 温子

六郎木 晴佳

六郎木 佳帆

皆月山王権現太鼓保存会会員



輪島市皆月日吉神社山王祭
フォトエスノグラフィー 祭日編

編集 川村清志・倉本 啓之©
発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
〒 285-8502 千葉県佐倉市城内町 117
2021 年 3 月 21 日

印刷・製本 株式会社弘文社